Ⅲ 学校評価自己評価

1．学園小中一貫教育報告一覧

学園名	「目指す子ども像」、教育目標
1 峰山学園	【教育目標】　「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」 【目指す子ども像】 「意欲を持って自ら学ぶ子ども（知）」 「思いやりのある子ども（徳）」 「進んで心と体を鍛える子ども（体）」
2 大宮学園	（1）教育目標　自他を尊重し、自ら学ぶ　子どもの育成 （2）目指す子ども像 ○ 意欲的に学び、チャレンジする子ども（知） ○ 自他を大切にし、思いやりのある子ども（徳） ○ 心身を鍛え、活動的な子ども（体）
3 網野学園	【目指す子ども像】 あ：明るく元気に進んで学ぶ子　【知】意欲的に学習に取り組む子ども み：みんななかよく支え合う子　【徳】規範意識を持ち、仲間と支え合う子ども の：のびのび生き生きやりぬく子【体】粘り強く心身を鍛え、やり抜く子ども 【教育目標】　将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす幼児・児童・生徒の育成を図る教育の推進
4 丹後学園	「目指す子ども像」 ①ことばで伝え合い、主体的に学ぶ子　【知】 ②自分を大切にし、人を思いやれる子　【徳】 ③ねばり強く身体をきたえる子　【体】 「教育目標」　夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成
5 弥栄学園	「教育目標」　ふるさとを愛し、主体的に学び、心豊かで、たくましく生き抜く子どもの育成
6 久美浜学園	［教育目標］　「ふるさとを愛し、意欲的に学び、やさしい心をもち、根気強く努力する子どもの育成」 ［目指す子ども像］ （知）意欲的に質の高い学力を身につけようとする子ども （徳）自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子ども （体）心身を鍛え、粘り強く最後まで、協力して取り組む子ども

2．京丹後市立こども園、学校評価自己評価報告一覧

学校名	学校・園教育目標
1 峰山こども園	“笑顔でつなごう。みんなの　てとて!!” ―　はなそう・つたえよう・みんなのおもい　― （1）生活に必要な習慣・態度を身に付け、健康な心と体で生きる力を育てる。 （2）主体的に活動し、言葉を介してコミュニケーション力を育てる。 （3）身近な人や地域とのかかわりを持つ力を育てる。
2 大宮こども園	人との関わりや体験を通して、心豊かでたくましく、生き生きとあそぶ子どもの育成 ○健康で安全に活動する子どもの育成 ○身近な環境に自ら関わり、主体的に行動・活動する子どもの育成 ○人の話をしっかり聞き、自分の思いや考えを素直に表現できる子どもの育成 ○素直で思いやりのある、積極的に関わり合う子どもの育成
3 網野こども園	○園児自らが主体的に環境に関わり、心豊かでたくましく生きる力を育てる。 ・明るく元気で主体的に活動する子どもの育成 ・みんななかよく思いやりのある子どもの育成 ・伸び伸び生き生きやりぬく子どもの育成 <テーマ> 『どきどき　わくわく　きらっ！　ひとりひとりがかがやいて』
4 丹後こども園	○心豊かに思いやりのある、優しさあふれる園児を育成する。 ○心も体もたくましく、意欲的に挑戦しながら生き生きと遊ぶ園児を育成する。 ○自分で考えて行動する園児を育成する。 ○言葉を介してのコミュニケーション力を育成する。
5 弥栄こども園	「みんな　だいすき　つながるえがお」 ～やってみたい！明日もやりたい！夢中になって遊ぶこどもをめざして～ ・さまざまなことに心を動かし、心豊かな子どもを育てる。 ・生活に必要な習慣・態度を身につけ、健康な心と体を育てる。 ・身近な人や地域とのかかわりをもつ力を育てる。
6 かぶと山こども園	こども園教育・保育目標「元気な体と豊かな心、生きる力をもったたくましい子ども」 ≪元気　勇気　笑顔　つながれ仲間≫　～いっぱい遊ぼう　育ち合おう～ 1　園児自らが興味関心をもって環境に関わり、心豊かでたくましく生きる力を育てる。 2　人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、人権を大切にする心を育てる。 3　相手の思いを受け止めながら、自分の思いや考えを表現できる力を育てる。

学校名	学校・園教育目標
7 峰山小学校	社会の中で自立し、多様な人々と協働して、個性や能力を生かしながら創造的に生きることができる力を育てる。 1　将来に生きて働く質の高い学力を育てる。 2　よりよい生き方・在り方を深く考え、自律的に行動する力を育てる。 3　学んだことを生かして、よりよい社会の形成に貢献しようとする態度を育てる。
8 いさなご小学校	教育目標「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」 目指す子ども像 1　意欲を持って自ら学ぶ子ども 2　思いやりのある子ども 3　進んで心と体を鍛える子ども
9 しんざん小学校	1　一人一人が自己肯定感を持ち、いきいき活動する学校【児童・生徒】 2　「峰山学園卒業時の子どもの姿」に全教職員が責任を持つ学校【教職員】 3　保護者・地域に信頼される学校【保護者・地域】
10 長岡小学校	「峰山学園」経営方針を踏まえ、教育活動全般を通して学校教育目標「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」に迫る。 〈目指す子ども像〉 ・意欲を持って自ら学ぶ子ども ・思いやりのある子ども ・進んで心と体を鍛える子ども
11 大宮第一小学校	◇　一人一人が輝き、生き生き活動する学校【児童】 ◇　やりがいを持って自分の力を発揮する学校【教職員】 ◇　安心して子どもを任せられる学校【保護者】 ◇　他地域に誇れる地域とともにある学校【地域の方】
12 大宮南小学校	大宮学園　教育目標 「自他を尊重し、自ら学ぶ　子どもの育成」 ・学級づくりを基盤にして、「主体的・対話的で深い学び」の実現による授業改善を行い、確かな学力をつける。 ・「自他を大切にする心」を育成するための教育活動を充実させる。 ・全ての教育活動で「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」の育成を目指す。
13 網野北小学校	1　規範意識を醸成し、落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2　すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 3　思いやりをもち仲間と共に生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 4　自然・人・社会とつながり、郷土を愛する心を育てる。
14 網野南小学校	網野学園保幼小中一貫教育の目標から 「将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす児童・生徒の育成」 目指す子ども像 ・あかるく元気に進んで学ぶ子 ・みんななかよく支え合う子 ・のびのび生き生きやりぬく子
15 島津小学校	1　規範意識を醸成し、落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2　すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 3　思いやりをもち仲間と共に生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 4　自然・人・社会とつながり、郷土を愛する心を育てる。
16 橘小学校	【教育目標】 「将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす児童・生徒の育成を図る教育の推進」 【目指す子ども像】 あ：明るく元気に進んで学ぶ子　【知】意欲的に学習に取り組む子ども み：みんななかよく支え合う子　【徳】規範意識を持ち、仲間と支え合う子ども の：のびのび生き生きやりぬく子【体】粘り強く心身を鍛え、やりぬく子ども 【学園経営の基本方針】 自然・人・社会とのつながり、郷土を愛する心を育てる。（特に重視）
17 丹後小学校	教育目標（丹後学園共通） 「夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成」 ＜目指す学校像＞ 1　よく考え学ぶ学校 2　友だちと仲良くする学校 3　最後まで粘り強く努力する学校 4　家庭・地域のつながりを生かした学校
18 宇川小学校	「夢と希望と創造性あふれる豊かな心をもち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成」 ・将来を展望し、未来を拓くために充実した学校生活を送る学校【児童】 ・目指す子ども像を基に、全教職員が連携を図り、責任を持つ学校【教職員】 ・保護者・地域に信頼される学校【保護者・地域】

学校名	学校・園教育目標
19 吉野小学校	1　生徒指導の３機能を生かした授業づくりと学級経営を推進し、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得と、思考力・判断力・表現力の育成を図る。 2　確かな学びの力と豊かな人間性をはぐくみ、一人一人が大切にされる心の育成を図る。 3　家庭地域とつながり、信頼される学校・特色ある学校づくりを推進する。 4　学園の保幼小中一貫教育を、様々な取組みを充実させながら推進する。
20 弥栄小学校	「ふるさとを愛し、主体的に学び、心豊かで、たくましく生き抜く子どもの育成」 ・知識と技を磨き、活用する子 ・自他の良さを知り、共に伸びる子 ・心身をきたえ、何事もやりぬく子
21 久美浜小学校	学校教育目標の達成に向け、校訓「一生懸命」を意識した教育活動を推進する。 1　質の高い学力をつけるための学習指導及び学習環境整備を進める。 2　質の高い学力を培う基盤として、児童同士及び教職員と児童との好ましい人間関係の構築を一層進める。 3　中学校卒業時の生徒像を常に意識し、学園教職員として互いに理解し合い、学園経営と学校経営の連携を図りながら進める。
22 高龍小学校	意欲的に生活・学習に取り組む子どもの育成 ―　子どもの実態や系統性を踏まえた指導　― 1　基礎・基本の徹底 2　主体的に学ぶ力の伸長（授業づくり） 3　家庭学習時間の確保
23 かぶと山小学校	（1）居心地のよい学校 安心と安定のある学級経営の充実 望ましい人間関係を築く力の育成 （2）学力向上を図る学校 基礎基本の定着、思考・表現・判断力を充実させる学習活動の推進 （3）家庭・地域にひらかれ、信頼ある学校 家庭や地域と協働する学校づくりの推進
24 峰山中学校	【教育目標】 自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ生徒の育成 【めざす生徒像】 ・意欲を持って自ら学ぶ生徒 ・思いやりのある生徒 ・進んで心と体を鍛える生徒 【重点課題】（社会的自立につなぐ教育） ・保幼小中一貫教育の手法を用いた授業改善と学力の向上 ・豊かな人間性の育成と不登校の解消・未然防止
25 大宮中学校	1　夢や希望を持って未来を切り拓く能力と実行力の育成 2　学習意欲を高める授業改善と家庭学習の定着 3　健康な体と豊かな心の教育の充実 4　信頼され、開かれた学校づくり 5　教職員の資質能力の向上 6　大宮学園保幼小中一貫教育の推進
26 網野中学校	将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす生徒の育成を図る教育の推進 1　規範意識を醸成し、落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2　未来を展望し、自ら未来を切り拓く力を付ける。 3　思いやりをもち仲間とともに生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 4　自然・人・社会とつながり、郷土を愛する心を育てる。
27 丹後中学校	開校７年目となる教育活動を充実させ、保護者・地域から信頼される学校経営を行う。 生徒が「本気で本物に挑戦する」ための教育環境をつくり、自分の可能性に果敢に挑み力を伸ばすことに専念させる。
28 弥栄中学校	1　全教職員で、生徒・保護者との信頼関係を築く。 2　主体的に学び、たくましく心身を鍛え、人権尊重を基に人間性豊かな生徒を育む教育課程の編成と実施に努める。 3　基礎的・基本的内容の指導の徹底と定着を図る授業づくりを進める。 4　知識技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力を育んでいく。 5　未来を拓くために主体的に進路選択ができる能力を育てる。
29 久美浜中学校	＜久美浜学園＞　指導の重点：学力向上 (1) 基礎・基本の徹底 (2) 主体的に学ぶ力の伸長（授業づくり） (3) 家庭学習時間の確保 ◆規範意識の醸成を基盤とし、当たり前のことが当たり前にできる学校、「命」「今」「仲間」を大切にする学校を目指す。 ◆久美浜学園保幼小中一貫教育の一層の推進により、指導観について共通理解を図り、系統的、組織的な教育実践を推進する。 1　「主体的・対話的で深い学び」を追求した授業の充実による学力の向上 2　好ましい人間関係の構築と自己肯定感・自己有用感の向上 3　不登校の未然防止と不登校（傾向）生徒の改善 4　「久美浜学園学校運営協議会」を核とした地域力と学校力を統合した、地域ぐるみの子育て支援体制の確立 5　新型コロナウイルスと共存した新しい生活様式の確立と「新しい教育の創造」

（別紙様式２）

令和２年度　峰山学園保幼小中一貫教育報告書

１　「目指す子ども像」、教育目標

【教育目標】
「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」
【目指す子ども像】
「意欲を持って自ら学ぶ子ども（知）」
「思いやりのある子ども（徳）」
「進んで心と体を鍛える子ども（体）」

２　保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組みの柱とする内容

指導の重点「確かな学力の育成（授業研究）」「コミュニケーション能力の育成（生徒指導・特別活動」「評価を見通した取組みの充実」を各小・中学校の教育活動や校内研究・研修に位置付ける。

(1)　確かな学力の育成

言葉の力の育成を土台として「わかる」「できる」授業を行い、自己肯定感を高めるため、学園で共通させる指導の目標と視点を踏まえて、小学校から中学校まで一貫した実践を進める。（授業研究）

※「確かな学力」を、峰山学園では、「生きて働く知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」を総合したものと捉える。

ア　生徒指導の３機能を生かした授業を進める。

授業の中で目指す児童生徒の姿（３目標）	そのための指導方法　（３視点）
①自己決定をしている ②自己存在感を感じている ③共感的な人間関係をはぐくんでいる	①主体的に活動する場面が設定された授業 ②本時の目標が明確で「わかる」授業 ③学びを深める多様な学習形態を取り入れた授業

イ　目標と指導と評価の一体化を進める。
（ア）目標から単元総括テスト作成し、それを踏まえた指導計画と授業設計
（イ）単元総括テストの蓄積と検証

(2)　コミュニケーション能力の育成

確かな学力を育成する授業実践と連動し、言葉の力の育成を土台として生徒指導の３機能を踏まえた就学前から中学校まで一貫する積極的な生徒指導を進める。（生徒指導・特別活動）

ア　生徒指導の３機能を生かした教育活動（積極的な生徒指導）
イ　自己肯定感を高める取組み（特別活動）
（ア）学校や地域社会の一員として主体的に参加する取組み
（イ）集団の中で豊かに人とかかわることができる取組み

(3)　評価を見通した取組みの充実

ア　学園評価・学校評価の結果に基づく学園経営の充実
イ　教育評価・指導評価の結果に基づく教育実践の改善

３　保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 （実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等）
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	（１）学園内の全ての学校が、年度当初から目指す子ども像・教育目標を共通化 （２）学園内の全ての学校が、学園経営方針を各学校の経営方針へ位置付け （３）学園内の全ての学校が、学園経営の課題・重点について各学校の経営方針へ位置付け	（１）児童生徒の実態や課題などや目指す子ども像、目標方針の共有について ○年度当初の研修会で、峰山学園の児童・生徒実態から明らかにした経営方針を全教職員で確認し、運営ができた。 ○児童・生徒の状況については、各会・部会で共通理解を図り、取組みに生かしている。担任会でも、児童の状況について交流を行ったり、指導方法等を学び合ったりしている。 （２）学校経営及び進行管理 ○経営会議を定期的に開催し、学園内の教育課題の把握・整理を行いながら、教育目標・目指す子ども像の実現を目指して経営を行うことができた。 ○経営会議で、運営部会、教育課程部会、生徒指導部会、教育支援部会、学習指導部会の取組み等を把握することができた。 ○担任会の実践を進めるために、担当校長・教頭、教務主任が担任会に入り、中学校数学科の教員が５・６学年担任会に加わり、学習指導部会と連携できる組織となり、より充実した活動ができた。 ○担任会で総括テストを交流することは、テストを作成するために単元の指導構想をつくったり、５・６年担任会では、中学校の先生方から意見をいただくことができたりして、自らの指導力の向上に役立った。 ○１年担任会後半には、こども園から園長、担任が参加し保幼小の接続がスムーズにいくように連携を深めた。

就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	(1)自己肯定感を育てる授業づくり・生活づくり (2)汽水域を中心とした教育課程の編成と一貫した指導 (3)単元総括テストの作成と交流 (4)京丹後市保幼小中一貫教育モデルカリキュラムの積極的な活用 (5) 学力充実期間等の設定 (6) 中1ふりスタ (中学校1年生集中振り返り学習) (7)全ての学年でのふりスタ (8)家庭学習がんばり週間の実施 (9) 中学校体験授業 (10)「5年生・6年生の心得」の検討 (11) 二分の一成人式(小学校4年生)、立志式(中学校2年生) (12) こども園、小学校の接続を中心とし教育課程の編成と一貫した指導 (13) アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムの実践と検証と改善 (14) 不登校にかかる事例研「不登校の子どもと家庭への小中連続した支援の在り方について」の実施	就学前から中学卒業までを見通した一貫した指導の充実と教育課程編成を行う。 本年度、0期、Ⅰ期～Ⅲ期をより意識した指導を行うことを年度当初で確認した。教育課程部会、担任会で峰山学園の児童生徒につける力の検討を行ってきた。このことが、一貫性・系統性のある教育課程による指導につながっていく。 (1) 児童生徒の実態や課題、目指す子ども像の共有 ○経営会議で決定したことを各校へ持ち帰り、目指す子ども像の実現に向けて実践を積み上げることができた。 (2) 就学前から中学卒業までを見通して一貫した指導、教育課程 ○年間4回校園長会を実施し、連携を深め、10 年間を見通した指導について取組みを進めることができた。また、教育支援部会へのこども園の参加、1年担任会(こども園の参加)・教育課程会議の取組みで、一貫した園児・児童の支援を行うことができるようにしてきた。 ●こども園等から小学校へ、小学校から中学校への子どもに関わる情報については、個人情報であることを踏まえた対応と内容については、毎年確認をしてより良いものにしていく必要がある。アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムも改善し、実践する。 ○本年度、教育目標、目指す子ども像の実現を目指して、0期、Ⅰ期～Ⅲ期までの指導・支援の在り方について明確にしようと確認をして教職員が、協働して指導・支援を行ってきた。次年度以降もさらに0期、Ⅰ期～Ⅲ期までの指導・支援の在り方について明確にしていく。 ○指導の重点である確かな学力の育成では、生徒指導の3機能を生かした授業づくりを各小・中学校で進めることができた。また、 ○1中学校4小学校だから実施する必要性がある「中学校体験授業」等に取り組むことができた。また、「乗り入れ授業(小中連携加配)」(体育)にも取り組むことができた。 ●コロナ禍では「小学校合同校外学習」の実施は難しいが、ICT活用等の工夫をして可能な限り追究する。 ○児童生徒に基礎基本の力を身に付けさせるため、小4ふりスタ・6年生春季宿題の共通化・中1ふりスタ等の取組みを継続・充実させるとともに小1～小5までの各学年の学習の振り返りにも取組みを広げることができた。 ●小中の家庭学習の在り方について研究を継続し、小4からの家庭学習について改善を図り、自立した学びができる力を付け、中学校につなぐ研究を進める。 ○各校で積極的な生徒指導の取組みとして児童会・生徒会活動等だけでなく、授業にも生徒指導の3機能を生かす取組みができ、おおむね落ち着いた状況で生活できている。 ○生徒指導部会のアンケートを実施することで児童・生徒の実態をつかみ、SNS に係る指導を小・中学校で進めることができた。 ●SNS にかかる指導については、PTAとの連携が必要であるので、運営会議とも連携して進める。 ○「二分の一成人式」「立志式」に取り組み、自分の将来を展望する子どもたちを育てることができてきている。学園としてねらいや趣旨を共通化して、育成すべき力の実現を目指す。 ●今後も、「5・6年生の心得」などは、常に児童生徒の実態を踏まえ、検討を行い、全員で確認をしながら指導を進めていく。 ○不登校にかかる事例研を保幼小中の教員で行い、状況を共有し多様な方向からとらえることにより、具体的な対応について研究することができた。また、SC、SSW の参加依頼も行った。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	(1) 目指す子ども像の実現・目指す教師像の意識化に向けた教職員の協働及び教職員の交流 ア 教職員の合同研修会・実践交流の実施 イ 授業を通した研修会 ウ 担任会を通した研修 (2)「集団の中で豊かに人とかかわる力」や「コミュニケーション能力」を高めることを目的とした子どもの交流を図る行事等の計画・実施 ア 峰山中学校合唱祭 イ 部活動体験	○「『わかる』『できる』授業を推進するために小・中学校で共通確認する指導の視点」「生徒指導の3機能を生かした授業」について小中学校ともに各校で授業研究に取り組むことができ、授業改善を前進させることができた。 ○ロイロノートの活用に向けた研修会を行った。 ○全教職員の研修会での実践研究及び各部会での実践交流を通して、教職員の交流を図ることができた。 ○峰山中学校合唱祭(中止)・クリーンキャンペーン・部活動体験・体育祭・ふれあい交流会等、児童生徒は交流を通して中学校への不安を解消したり、自己肯定感を高めたりすることができた。 ●感染予防が必要な中、小学校合同校外学習・合同授業等を通して小小の交流を深め、豊かな学習を創り上げるために何ができるか探っていく。 ●交流会が実施できない中、保幼小中の教職員及び峰山高等学校との授業研究等を通して今後も連携を深めていく。

	ウ　合同授業・学びの交流等 エ　体育祭等 オ　生徒指導の３機能を生かした「わかる・できる」授業実践 カ　学校や地域の一員として主体的に参加する取組み	
家庭、地域社会との連携、情報発信	（1）家庭・地域への情報発信 （2）学校支援ボランティアの活用 （3）家庭との連携	○学園の課題（基本的な生活習慣や家庭学習習慣の確立、ほめて育てる家庭教育等）と連携した峰山学園ＰＴＡ統一目標を策定したり、具体的にＰＴＡ挨拶運動（峰山学園ＰＴＡみんなでおはよう運動及び交通安全指導）を実施したりすることができた。 ○保幼小中一貫教育学園コーディネーターの役割を明確にし、学園だより・ホームページ・リーフレットの作成を運営会議と分担したことで、学園の教育活動を保護者・地域に丁寧に広報することができた。 ○地域コーディネーターの配置を受け、学校支援ボランティア等を活用し、市民が、学校教育活動に積極的に参加できる取組みを進めることができた。 ○ＳＮＳについて、各小中学校で実態に合わせてＰＴＡと連携して取り組むことができた。今年度は SNS 講演会も児童生徒対象、保護者対象の２部制で実施できた。今後もＳＮＳに係る指導をＰＴＡと連携して進めていく。

4　今年度の成果と課題　改善方策

成果と課題	改善方策
≪成果≫ 1　児童生徒、教職員アンケート結果より ・峰山学園の保幼小中一貫教育の成果は顕著に現れ、峰山学園の児童生徒の課題解消や軽減等は着実に進んでいる。 2　峰山学園の教職員のアンケートによって確実に保幼小中一貫教育で目指している指導が浸透してきている。今年度は、計画していた授業研究会の実施ができなかったが、各校や学年会等で授業について小・中学校の教員が学園の授業改善の目標を意識して研究を進めている。 3　学園経営及び進行管理について ・経営会議が運営会議、教育課程会議及び生徒指導部、学習指導部などを統括する必要があり、組織改編を行った。 ・担任会の実践を進めるためにより機能的な組織体制にして、担任会がより授業づくりの実践推進を担うよう学習指導部と連携できるようにした。 ・担任会の活動内容（総括テスト、学習の振り返り）を明らかにし、授業改善や学力向上に繋がる実践を取り組むことが出来た。 ・学園が標榜している授業改善の３つの柱（授業を見る視点、生徒指導の３機能、目標と指導と評価の一体化）に焦点化した実践を進めることができた。 4　10 年間を見通して一貫した取組みについて ・「目標と指導と評価の一体化」を具体化するための実践を担任会に位置付け学習指導部と連携しながら（言葉の力の育成：思考する力・判断する力・表現する力）に焦点を当てた評価テストの作成等に取り組むことができた。 ・生徒指導の３機能を育む授業の推進に向けて、学習指導部会と生徒指導部会が連携し、授業研究会等での実践交流を通して、授業改善を図ることができた。 ・10 年間を見通した連携・一貫した指導となるよう分掌や分掌の任務の改善を進める。 特に、０期～Ⅲ期に目指す児童生徒像を具体化してその指導を行う。学園内で各期に身に付けさせる力を協議して明らかにすることができた。 ・児童生徒に基礎基本の力を身に付けさせるため、小４ふりスタ・６年生春季宿題の共通化・中１ふりスタ等の取組みを継続・充実させるとともに小1～小５までの各学年の学習の振り返りにも取組	改善方策 ○令和３年度は、現体制（１中学校４小学校２こども園の組織図及び組織体制）で運営していく。 ○担任会の取組みの継続・発展 担任会…今年度の体制を維持し次の内容に取り組む。 ①学年の学習内容の復習のための課題づくり ②目標と指導と評価の一体化を具体化する総括テストづくりをすることによる指導力の向上を図る。 ③０期～Ⅲ期の指導目標を踏まえた指導の充実を図る。 ○小・中学校教員の研修会 授業づくりを中心とした協議を行い、小中学校で指導力の向上を図る。 ○令和３年度の目指す子ども像・教育目標・目指す教師像について、保幼小中一貫教育推進の手引きをもとに検討を行う。 【令和３年度】 1　目指す子ども像 意欲を持って自ら学ぶ子ども（知） 思いやりのある子ども（徳） 進んで心と体を鍛える子ども（体） 2　教育目標 「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」 3　目指す教師像 教育的愛情と、使命感・情熱に満ちている教師 人間的魅力にあふれている教師 高い「専門性」と「授業力」を持ち、確かな学力をつけることができる教師 児童生徒、保護者、同僚、地域の人から信頼される教師 「京丹後」への理解と愛情と、国際的な視点に立った教育を進めることができる教師 4　学園経営方針 （1）一人一人が自己肯定感を持ち、いきいき活動する学園【児童・生徒】 ア　自分の将来を展望し、意欲を持って学ぶことができる取組みを進める。 イ　自分の思いや考えが表現でき、共に学び、思いやることができる取組みを進める。 ウ　粘り強く挑戦し、自らの心や体を鍛えることができる取組みを進める。 （2）「中学校卒業時の子どもの姿」に全教職員が責任を持つ学園【教職員】

みを広げることができた。
・各校で積極的な生徒指導の取組みとして児童会・生徒会活動等だけでなく、授業にも生徒指導の３機能を生かそうとすることで、コミュニケーション能力を高めることができてきている。また、「二分の一成人式」「立志式」にも取り組み、成長を実感し自分の将来を展望する子どもたちを育てることができてきている。
・「自己肯定感を高め、『わかる』『できる』授業を推進するために小・中学校で共通確認する指導の視点」「生徒指導の３機能を生かした授業」について小中学校ともに授業研究に取り組むことができ、授業改善を大きく前進させることができた。
・保幼小中一貫教育コーディネーターの役割を明確にし、学園だより・ホームページ・リーフレットの作成を行い、学園の教育活動を保護者・地域に丁寧に広報することができた。
・不登校の未然防止に向けて、学園内で気になる子どもの実態交流をすることで、幼児期・学童期・思春期の変化とその時期に大切な支援や指導について研究を重ねてきた。そのことが不登校の未然防止につながっている。また、それぞれのステージで移行支援シートを丁寧に作成し、引き継いでいることも不登校の解消につながっている。
・不登校対応について、教育支援部会の中で小・中に兄弟関係のある事例を取り上げ、家庭支援の手法や児童生徒と学級とのつながりを作る学級経営について研修をすることで、SC・SSWの専門的な見立てからも学び、状況改善に向けての取組みを進めることができた。
・相談部による校内サポートなど学校が組織として継続して支援をすることを推し進めてきた結果、不登校の未然防止につながった。
・コロナ禍ではあったが、ペアやグループでの学習形態を計画的に取り入れることで、子ども達のつながりを育み、学習意欲の向上や不登校の未然防止につなぐことができた。

≪課題≫
1　令和３年度学園経営に向けて
（1）組織体制及び運営上の改善
・10年間を見通した連携・一貫した指導となるよう分掌や分掌の任務の改善を進める。特に、０期～Ⅲ期に目指す児童生徒像を目指した指導をさらに進める。
（2）令和３年度に向けての重点的な課題・取組みの方向
【教育目標・目指す子ども像・学園経営方針】
・令和３年度についても、学園として教育目標「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子」の実現に向けて、ＰＤＣＡサイクルで、学園経営を行っていく。
【学園指導の重点】
・特に「確かな学力の育成」に関する取組みでは、「目標と指導と評価の一体化」を進めて行く。小小連携で、単元末総括テストの作成・実施・評価・改善に力を入れて取組みを更に進める。
・「目標と指導と評価の一体化」について、中学校での実践のわかる化を進める。
・夏季研修については、教職員の指導力量を高めていく取組みの大きな節としていく。特に、保幼小中連携に焦点を当てた取組みとする。
・授業研究については、学習指導部会が中心となって「自己肯定感を高め、『わかる』『できる』授業を推進するために小・中学校で共通確認する指導の視点」「目標と指導と評価の一体化」「生徒指導の３機能を生かした授業」を基に行う。小中全教職員が授業研究にかかわるためにも、各校で視点を明確にした実践を積み上げる。
・4月より一人１台タブレットが導入されることをチャンスととらえ、ロイロノートの活用を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指して
ア　児童生徒の願い・希望・悩みに正面から向き合い、共感的理解と指導に努める。
イ　「わかる」「できる」授業・生活の創造に取り組み、専門性の向上を図る。
ウ　10年間を見通して、一貫性・系統性のある指導を行う。
エ　互いに学び合い、協働的な教育活動を展開する組織を構築する。
オ　保護者や地域の人達と連携して児童生徒の社会的自立を図る指導を進める。
（3）保護者・地域に信頼される学園【保護者・地域】
ア　ＰＴＡ・地域と連携した自己肯定感を高める取組みを進める。
イ　保護者・地域へ双方向の情報発信を行う。
ウ　市民が学校の教育活動を積極的に支援する取組みを進める。
○学園指導の重点
指導の重点「確かな学力の育成（授業研究）」「コミュニケーション能力の育成（生徒指導・特別活動」「評価を見通した取組みの充実」を各小・中学校の教育活動や校内研究・研修に位置付ける。
教育課程部会が担任会等で協議して作成した（０）Ⅰ～Ⅲ期における「目指す姿一覧」を意識した指導を行う。
（1）確かな学力の育成
生徒指導の３機能を生かした「わかる」「できる」授業を行い、自己肯定感を高めるため、学園で共通させる指導の目標と視点を踏まえて、小学校から中学校まで一貫した実践を進める。（授業研究）
※「確かな学力」を、峰山学園では、「生きて働く知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」を総合したものと捉える。
ア　生徒指導の３機能を生かした授業を進める
授業の中で目指す児童生徒の姿　（３目標）
①自己決定をしている
②自己存在感を感じている
③共感的な人間関係をはぐくんでいる
そのための指導方法　（３視点）
①主体的に活動する場面が設定された授業
②本時の目標が明確で「わかる」授業
③学びを深める多様な学習形態を取り入れた授業
イ　目標と指導と評価の一体化を進める
（ア）目標から単元総括テスト作成し、それを踏まえた指導計画と授業設計
（イ）単元総括テストの蓄積と検証
ウ　ICT・ロイロノートの活用をすることにより、生徒指導の３機能（３目標・３観点）を生かすとともに「対話的・主体的で深い学び」の実現を目指した授業づくりを行う。
（2）コミュニケーション能力の育成
確かな学力を育成する授業実践と連動し、言葉の力の育成を土台として生徒指導の３機能を踏まえた就学前から中学校まで一貫する積極的な生徒指導を進める。（生徒指導・特別活動）
ア　生徒指導の３機能を生かした教育活動（積極的な生徒指導）
イ　自己肯定感を高める取組み（特別活動）
（ア）学校や地域社会の一員として主体的に参加する取組み
（イ）集団の中で豊かに人と関わることができる取組み
（ウ）一人一人の居場所を確保し不登校の解消につなぐ取組み
（3）今年度の年度末研修会で、中学３年生数学科公開授業、ロイロノート活用研修を行い、次年度からの授業づくりにロイロノート活用のイメージを共有することができた。次年度の授業づくりに、従来の視点にタブレット・ロイロノートの活用の視点も加え、研究を進めていく。
（4）評価を見通した取組みの充実
ア　学園評価・学校評価結果に基づく学園経営の充実
イ　教育評価・指導評価結果に基づく教育実践の改善

授業改善を行う。
・「確かな学力の育成」「コミュニケーション能力の育成」では、「言葉の力の育成」に焦点を当てた実践を進める。
・不登校の解消に向けて、今年度の取組みを継続するとともに、関係機関との連携を更に深め、個に応じた対応から社会的自立につなぐ指導を展開する。
・生徒指導部会では、各校で取り組まれている積極的な生徒指導の取組みを交流し、自己指導能力・人間関係力を身に付ける指導方法・取組みについて実践を積み上げていく。その中で、中学校卒業時に付けるコミュニケーション能力を明らかにしていく。同時に、指導者として各学年・発達段階に応じてそのためにどのような手立てが必要か検討していく。
・「５・６年生の心得」については、現状を踏まえて検討し、「５・６年生の心構え」として次年度に引き継ぐ。
・SNS 講演会については、児童生徒向けと保護者向けを実施できたが、主催、運営等の役割分担について一定整理する必要がある。
・学園評価について、方針に基づいて早い段階から、評価の計画・見通しを持ち、学園運営協議会での評価により指導の改善を図る。
・教育評価（総括テスト等）から、教育指導を実践していく。ゴールや出口を明らかにすることでより質の高い取組みを行う。
・保護者、地域の方々の評価については変更を加える。
【保幼小中一貫教育の具体的な内容】
・０期・Ⅰ期～Ⅲ期の実践を明確にし、小中一貫教育の姿を確認する。

（３）令和３年度に向けての年間計画・行事の見直し
コロナ禍で制限もあり配慮が必要だが、保幼小中一貫教育の取組みを継承・発展する視点と、実態に応じて見直す視点をもつ。

○　保幼小中一貫教育の具体的な内容
１　児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標方針の共有に向けて
（１）学園内の全ての学校が、目指す子ども像・教育目標を共通化
（２）学園内の全ての学校が、学園経営方針を各学校の経営方針へ位置付け
（３）学園内の全ての学校が、学園経営の課題・重点について各学校の経営方針へ位置付け

２　就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程
（１）峰山学園の目指す子ども像を見通した指導と教育課程の作成
ア　自己肯定感を育てる授業づくり・生活づくり
イ　汽水域を中心とした教育課程の編成と一貫した指導
・小６児童の不安感や中１生徒の困り感の再検証
中１ギャップの捉え直し
・単元総括テストの作成と交流と検証
・京丹後市保幼小中一貫教育モデルカリキュラムの積極的な活用
・学力充実期間等
・乗り入れ授業
・小学校高学年での一部教科担任制（音楽科）
・中１生集中振り返り学習
・全ての学年でのふりスタ
・中学校体験授業（年２回）
・二分の一成人式（小４）、立志式（中２）
ウ　０期Ⅰ期～Ⅲ期の目指す姿を達成できる指導について協議、実践していく。
・「５・６年生の心構え」については、児童生徒の実態を踏まえ、検討を継続していく。
エ　園小接続を中心とした教育課程の編成と一貫した指導
・アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムの実践と検証

３　子ども、教職員の交流と協働
（１）「目指す子ども像」の実現・「目指す教師像」の意識化⇒教職員の協働及び教職員の交流
ア　教職員の合同研修会・実践交流の実施
イ　授業を通した研修会
ウ　担任会を通した研修
（２）「集団の中で豊かに人と関わる力」や「コミュニケーション能力」を高めることを目的とした子どもの交流を図る行事等の計画・実施
ア　峰山中学校合唱祭
イ　部活動体験
ウ　合同授業・学びの交流等
エ　峰山中学校体育祭
オ　生徒指導の３機能を生かした授業実践
カ　学校や地域の一員として主体的に参加する取組み
キ　クリーンキャンペーン
ク　SNS 講演会（峰山学園主催、運営：運営会議・峰山学園生徒指導部）

４　家庭、地域社会への積極的な情報発信
（１）峰山学園運営協議会による評価の実施と学園の目標、教育活動の保護者・地域住民への積極的な情報発信
（２）中学校区の家庭教育の課題（基本的な生活習慣や家庭学習習慣の確立、ほめて育てる家庭教育等）を踏まえた「峰山学園」ＰＴＡ統一目標の設定
（３）「峰山学園」ＰＴＡ統一目標に沿った校区全体及び各学校での具体的取組みの計画・実施
（４）学園の教育活動に支援体制（学校支援ボランティア等）の機能化と充実
（５）SNS 講演会（保護者向け）については、小中一貫校 PTA の取組みとして位置付け、各校 PTA の計画等にも組み入れる。

（別紙様式２）

令和２年度 大宮学園保幼小中一貫教育報告書

１ 「目指す子ども像」、教育目標

（１）教育目標
　自他を尊重し、自ら学ぶ　子どもの育成
（２）目指す子ども像
○ 意欲的に学び、チャレンジする子ども（知）
○ 自他を大切にし、思いやりのある子ども（徳）
○ 心身を鍛え、活動的な子ども（体）

２ 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組みの柱とする内容

（１）確かな学力の育成：「言語活用カリキュラム」の継続
①基礎学力の向上を目指した授業改善（授業づくり）
②小中で連携した「主体的・対話的で深い学び」の実現による授業改善（授業づくり）、授業計画の策定
③「ことばの力」の育成（言語活動の充実）を目指した授業改善（授業づくり）
④保幼小の接続のためのアプローチプログラム・小１スタートカリキュラムの自学園化
（２）人権意識の育成：「人権教育カリキュラム」の継続
①人権教育の理念に基づく「自他を大切にする心」を育成するための教育活動の充実
　全ての教育活動で「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」の育成
②人権意識を育成するための人権学習の充実
（３）連携・体験活動の充実
①５歳児１年生・汽水域を中心にした効率的・効果的な連携教育活動、体験活動の充実
②体験活動を通して「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」の育成
③効率的・効果的な共通した学校のきまり（学習・生徒指導・家庭連携）
④丹後学、キャリア教育の視点を踏まえた夢・未来式（４年生・中３年生）の実施
（４）目指す子ども像の実現を見通した教職員の交流と協働：「精選とニーズ」への対応
①教職員の確かな学力の育成に向けての授業研究
②教職員のニーズを踏まえた小中、保幼小の研修会・実践交流会の推進
（５）家庭、地域社会への啓発、情報発信
①大宮学園の家庭教育の課題を踏まえた「大宮学園」ＰＴＡ統一目標の策定
②家庭教育委員会による「家庭のやくそく」の継続と啓発、親のための応援塾の継続
③ＰＴＡ統一目標に沿った校区全体及び各学校での具体的取組みの計画・実施
④大宮学園運営協議会（大宮学園コミュニティ・スクール）による大宮学園教育環境づくりの推進
⑤「大宮学園」学校評価の実施と保護者・地域住民への啓発

３ 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 （実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等）
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	(1)　学園内の全ての園・学校が、教育目標、目指す子ども像を共通化する。 (2)　学園内の全ての園・学校が、学園経営計画を各校の経営計画へ位置づける。 (3)　学園内の全ての園・学校が、学園の子どもの実態・課題、学園重点方針等	(1)　学園教育目標及び目指す子ども像に向けて、学園内の２園所、３校での共通化に取り組んだ。 (2)　学園経営計画を各園所、学校の経営計画に位置付け、経営の充実に取り組んだ。 (3)　学園教育課題、各会議・部会の推進状況を把握し、学園経営を統括し、一貫した教育指導・活動の充実に努めた。 (4)　大きな課題となる不登校について、共通認識と連携の

	を各校の経営計画へ位置づける。 (4)　学園小中一貫教育推進部会による理論・実践研究成果を各校に波及させる。	在り方について協議を重ね、指導支援に生かした。特に、教育支援部会で事例研究を通して不登校への理解と支援の在り方について研修を積み重ねることができた。 (5)　共通認識をもってコロナ対応を行った。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	(1)　大中校区小中一貫校教育課程の編成 ①汽水域指導プログラムの推進等 ・小中学校での乗り入れ授業の計画・実施（加配の活用） ・５・６年生での一部教科担任制 ・中学校授業体験（年２回） ②Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期の学習への円滑な接続 ・アプローチプログラム、小１スタートカリキュラム（５歳児担任・１年担任） ・夢・未来式の実施（小４年生・中３年生） ・小４・中１ふりスタ ・中学校定期テスト模擬体験 ・春季休業中の共通宿題（６年生） ③家庭学習の充実 ・家庭学習の統一手引き ・家庭学習がんばり旬間 (2)　学力充実向上に関する取組みの進行管理 ①学力調査と分析 ②学力向上のための授業充実・授業力向上 (3)　生徒指導・教育相談に係る情報の共有と連携 ①５・６年生の心得、共通の生活の決まり ②情報モラル教室 ③保幼小中連携シート (4)　モデルカリキュラムに係る推進	(1)　大中校区小中一貫校教育課程の編成について ①汽水域指導プログラムの推進等について ・小中連携加配の乗り入れ授業（音楽）と英語専科教員による外国語の授業を実施し、児童の実態把握や指導に効果があった。 ・人権教育加配が小学校での学習補助にあたることで、児童支援や児童の状況把握に効果があった。 ・体験入学や授業体験の実施により、入学への楽しみや期待につなげることができた。 ②Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期の学習への円滑な接続について ・保園と小学校との連携のもと、小１プロブレムの解消に向けての取組みを行うことができた。 ・小４と中３で、夢・未来式に取り組んだ。 ・６年生を対象に共通テスト（数学）を実施し、中学入学後のテストに係る不安解消に向けて取り組んだ。 ③家庭学習の充実について ・家庭学習の手引き、家庭学習がんばり旬間により、家庭学習習慣の向上に取り組んだ。 (2)　学力向上に関する取組みの進行管理について ①学力充実部で学力分析を行うとともに、視点を明らかにした大宮学園授業研究会を行い、授業づくりに取り組んだ。 ②教科指導の連携・接続を目指し、担任会、小中連携による指導研究に取り組んだ。 (3)　生徒指導・教育相談の一貫・接続 ①学園として小中各校、一貫校PTAで情報モラル学習を実施し、多くのことを学ぶことができた。 ②事例研究、引き継ぎシート等の充実に取り組めた。 (4)　モデルカリキュラムに係る推進について ①学園としてモデルカリキュラムをもとにした授業の実施を行った。 ②学園としてのモデルカリキュラムに係る研究を推進していく必要がある。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	(1)　連携・体験活動 ①人権意見発表会（学校毎） ②合唱祭　③体育祭（招待状） ④部活動体験　⑤体験授業 ⑥花いっぱい運動（学校毎） (2)　幼児・児童・生徒交流活動 ①児童会・生徒会交流活動 ②挨拶運動　③生徒会アドバイス ④児童会・生徒会スローガン ⑤園児と中学生との合同避難訓練 (3)　教職員の交流と協働 ①担任会（小小担任会、１年担任と５	(1)　連携、体験活動、幼児・児童・生徒交流について ①コロナ感染防止による連携・体験活動の精選や変更を行わざるをえなかった。（合唱祭・体育祭は中学校のみで実施） ②児童会・生徒会交流活動、挨拶運動（ハイタッチモーニング）、部活動体験等、状況を判断しながら実施できた。 ③オンラインでの交流も実施でき、今後活用がさらに求められる。 (2)　教職員の交流と協働について ①合同授業研究会で、授業づくりについて学ぶ機会は大変意義深く、今後も充実を図っていく。 ②３部会での現状分析、実践交流に取り組んだ。

	歳児担任、６年担任と中１担任) ②授業研究に向けた取組みの推進 ③合同研修・実践交流会の実施	
家庭、地域社会との連携、情報発信	(1)　中学校区の家庭教育課題を踏まえた大宮学園」ＰＴＡ統一目標の策定 (2)　大宮学園ＰＴＡによる「家庭のやくそく」の取組み (3)　大宮学園ＰＴＡ統一目標に沿った校区全体及び各学校での具体的取組みの計画・実施 (4)　大宮学園運営協議会（大宮学園コミュニティ・スクール）への動きづくり (5)　「大宮学園」学校評価の実施と保護者・地域住民への啓発	(1)　大宮学園ＰＴＡの目標策定とともに、「令和版家庭の心得」を配布し、掲示することができた。 (2)　大宮学園ＰＴＡ事業計画に基づき、「エプロンでおはよう 挨拶運動」や「情報モラル学習会」等、計的に実施することができた。 (3)　大宮学園運営協議会が立ち上げられ、地域連携、教育支援を進めることができた。会員の皆様の思いや期待を運営に生かすことができた。 (4)　学園だより、ホームページの更新等で、教育活動の発信に努めた。 (5)　学園評価を実施し、今後に向けた評価をいただいた。

4　今年度の成果と課題　改善方策

成果と課題	改善方策
【成果】 (1)　学園教育課題、各会議・部会の推進状況を把握し、学園経営の統括、一貫した教育指導・活動を充実させることができた。 (2)　学園３会議（経営、運営、教育課程）及び３部会（学力充実、人権・生徒指導、教育支援）を機能させ、新型コロナ感染防止に対応した取組を推進できた。 (3)　すべての教育活動で「ことばの力」「思いやる力」「つながる力」の育成に向けて取組みを推進することができた。 (4)　視点を明確にした授業研究会を通して、主体的・対話的で深い学びによる授業改善を進めることができた。 (5)　不登校及び不登校傾向児童生徒に絞って事例研究を進めることで不登校に陥る背景の多様さと小中学校で配慮すべきポイントについて共通理解を進めることができた。 (6)　学園の経営会議（校長）、運営会議（教頭）の両方で担当指導主事から具体的な資料を基に不登校の状況について確認する機会が設けられることで、教育相談部を中心として不登校解消への意識が高まった。 (7)　校種間連携の必要性への意識が高まり、大宮中学校の小学校在籍時の欠席状況の情報提供（未然防止の観点）及び不登校傾向となった生徒に絞った小学校在籍時の欠席状況の情報提供（早期対応の観点）が進んだ。 (8)　大宮学園運営協議会を立ち上げ、委員の意見集約による来年度の活動の方向性を明確に示すことができた。 (9)　新型コロナ感染防止の視点でいろいろな対応	【課題】に対して (1)　学園評価を受け、小中一貫教育の３つの目的の共通理解を丁寧に行い、その共通理解に基づき、大宮学園小中一貫教育の目標、教育指導の重点、教育指導・活動の充実を図る。 ① 市の教育課題改善のため、小中一貫教育の目的についての共通理解を当初全体会で確実に行う。 ② その具現化に向け焦点化した大宮学園小中一貫教育の重点策定を行う。次年度も今年度評価に基づき、『連携・体験活動の充実』、特に「精選（効果的・効率的）と教職員のニーズへの対応」をキーワードとして取り組む。 ③ 指導の重点の具現化に向けて、学園で一貫して取り組むことの整理を行い、評価の充実を図る。 (2)　大宮学園小中一貫教育の目標・教育指導の重点を踏まえ、一貫した教育指導・教育活動を一層充実させるための学園経営の充実を図る。 特に、来年度も教職員の教育的ニーズに応じた日常的で効果的な連携教育活動を学園全体で共通理解のもとさらに推進していく。 ① 大宮学園３会議と教育課程推進３部会の経営及び活動の充実と各校への効率的な接続を図る。 ② 連携教育活動を効果的・効率的に進める。 ③授業研究を効果的・効率的に推進する。 ④ 担任会・教科部会等を効果的・効率的に進める。 (3)　不登校にかかる状況の把握、不登校児童生徒への指導支援の在り方と連携について学園として取組みを進める。 (4)　児童生徒の円滑な接続のための個別記録の活用及び不登校・不登校傾向児童生徒に特化した事例研究を継続して行う。 (5)　保幼小中の引き継ぎの在り方を今後も検討していく。

が求められる中、経営会議を中心として情報を共有し、共通認識を持って学園運営を行うことができた。 【課題】 (1)　学園評価を受け、小中一貫教育の３つの目的の共通理解を丁寧に行い、その共通理解に基づき、大宮学園小中一貫教育の目標、教育指導の重点、教育指導・活動の充実を図る。 (2)　大宮学園小中一貫教育の目標・教育指導の重点を踏まえ、一貫した教育指導・教育活動を一層充実させるための学園経営の充実を図る。 (3)　不登校・特別支援教育・就学指導に係る学園課題に対して、さらに実践研究を積み重ねる。 (4)　教育支援が必要な幼児・児童生徒や、特別支援及び教育相談における校種間連携の仕組みを整え、校種間の円滑な接続を推進する。 (5)　大宮学園運営協議会（学園コミュニティ・スクール）との協働をさらに進め、より地域とともにある学園（学校）を目指す。	(6)　アセスメント票、個別の指導計画・支援計画の有効活用及び共有の在り方について検討を重ねる。 (7)　教育相談、不登校、家庭支援に係る情報交流と指導の在り方について継続して研究を進める。 (8)　大宮学園運営協議会の学園運営協議会（学園コミュニティ・スクール）での来年度の方向性を踏まえ、来年度当初の協議会では具体的な提案を行い、活動を通してより地域とともにある学園（学校）を目指す。 (9)　新型コロナ感染防止を徹底し、経営会議が各会議・部会の進捗状況を把握し、事業や取組みを推進していく。

（別紙様式２）

令和２年度　網野学園保幼小中一貫教育報告書

１　「目指す子ども像」、教育目標

【目指す子ども像】
あ：明るく元気に進んで学ぶ子　【知】意欲的に学習に取り組む子ども
み：みんななかよく支え合う子　【徳】規範意識を持ち、仲間と支え合う子ども
の：のびのび生き生きやりぬく子【体】粘り強く心身を鍛え、やり抜く子ども
【教育目標】
将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす幼児・児童・生徒の育成を図る教育の推進

２　保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組みの柱とする内容

(1) 確かな学力の育成
ア　主体的・対話的で深い学びの実現
イ　学びのスタイルの確立と活用能力の向上
(ｱ)　本時の『めあて』を全体で共有し、提示する。
(ｲ)　「思考をくぐらせる」場面をつくる。
(ｳ)　「考えを交流する」場面（ペア・グループ学習等）をつくる。
ウ　家庭学習の習慣化
(ｱ)　低：２０分以上　(ｲ)　中：４０分以上　(ｳ)　高：６０分以上 (ｴ)　中学：９０分以上
(2)　規範意識の醸成
ア　学習規律の確立
(ｱ)　人の話を聴く　(ｲ)　時間を守る　(ｳ)　服装・姿勢を正す
イ　生活習慣の確立
(ｱ) テレビ・ゲーム・インターネット・ＳＮＳなどのルールを決める。
(3)　豊かな人間性の育成
ア　積極的な生徒指導　イ　コミュニケーション能力の育成　ウ　ボランティア活動
エ　自立的に生きる基礎の確立
(ｱ)　切れ目のない組織的な支援　(ｲ)　保護者との連携

３　保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 （実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等）
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	ア　学園内の全ての学校が、目指す子ども像・教育目標を共通化 イ　学園内の全ての学校が、学園経営方針・目指す教師像の経営方針へ位置付け ウ　学園内の全ての学校が、「これだけは！」の各学校の経営方針へ位置付け	○経営会議で確認したことを学校園・各会議・各部会で年間計画に沿って取り組み、目指す子ども像の実現に向けて実践を積み上げることができた。 ○学園評価アンケートを実施し分析を行い、次年度の計画の改善に活かすことができた。 【網野学園児童生徒アンケートより】 ・児童生徒アンケート肯定率80%以上の項目数 小１（19／19）小２（19／19）小３（16／19） 小４（16／19）小５（18／20）小６（17／20） 中１（13／20）中２（13／20）中３（12／20） と概ね肯定的に捉えている。 ・「人の話を聞く」「時間を守る」「きまりを守る」等の項目については、児童・生徒が90%以上であり、教職員についても約 90%が指導を行ったと肯定的に捉えており、規範意識の醸成については、成果が現れている。 ・「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思う」については、全学年において90%以上が肯定的に捉えていることから、個々の違いを認め合い、思いやりを持ち仲間と共に生きていくことの大切さに気付いていると考えられる。 ・教職員アンケートの「いじめ・暴力事象を起こさない指導」は93%「互いに認め合い、思いやりを持ち、共に生きる指導」が 95%で肯定的に捉えており、日々の指導の結果が児童アンケートにつながる結果となった。 ・園所用のアンケートについては保幼小中一貫教育の視点に沿って見直し、改善を行い実施することができた。 ○「網野学園保幼小中一貫教育だより」「網野学園保幼小中一貫教職員だより」「網野学園学校運営協議会だより」を通して、各学校園・各部会・学校運営協議会の取組みを共有することができた。

就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	ア　規範意識を醸成し、落ち着いた環境をつくる取組み (ｱ)　「これだけは！」・「これだけは！」（授業編）の取組み (ｲ)　５年生中学校授業見学 (ｳ)　６年生中学校部活動体験 (ｴ)　６年生中学校体育祭取組み見学 (ｵ)　６年生中学校授業体験 (ｶ)　乗り入れ授業・小小連携授業の取組み・小中連携授業等の取組み (ｷ)　アプローチプログラム・スタートカリキュラムの見直し・検証 イ　未来を展望し、将来を切り拓く力を育成する取組み (ｱ)　家庭学習の手引き・家庭学習がんばり週間の取組み (ｲ)　６年生学年末テスト・６年生春季休業中の課題 (ｳ)　中１ふりかえり集中学習・小４ふりかえり学習 (ｴ)　京丹後市保幼小中一貫教育モデルカリキュラムの積極的な活用 ウ　思いやりをもち仲間と共に生きる人間関係を築く取組み (ｱ)　アルミ缶回収・ボランティア活動 (ｲ)　挨拶運動	○「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を保幼小連携部で共有し連携を進め、アプローチプログラム・スタートカリキュラムの実践や検証を行うことができた。また、網野学園各園所の実態にあわせてカリキュラムの編成を見直すことができた。 ○「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に軸足を置いた園所の指導により、入学後の児童には、自ら考え行動できる姿が見られた。 ○行動連携「これだけは」を基に一貫した指導を行い、各校で落ち着いた環境をつくり出すことができた。 ○行動連携「これだけは（授業編）」を基に指導を行い、「自分の考えをもつ」「授業で考えを交流する」では児童・生徒、教職員ともに80%以上が肯定的に捉えており、授業改善が進められてきている。推進会議が中心となって進めた単元構想シートの活用による授業づくりを教職員一人一人が意識して行った結果であると考えられる。 【網野学園教職員アンケート結果より】 ※今年度肯定率　「思考をくぐらせる」81% 「考えを交流する」　87% ※昨年度肯定率　「思考をくぐらせる」60% 「考えを交流する」　68% ○小学校から中学校への円滑な接続を目指し、「５年生中学校授業見学」「６年生中学校部活動体験」「６年生中学校体育祭取組み見学」「６年生中学校体験授業」を行った。また小中連携加配（算数科）、英語専科教員による授業を５、６年生対象に行ったことで不安を軽減し、中学校への憧れを抱くと同時に学習意欲や行動面での高まりが見られるようになった。 部活動体験については、中学３年生が活動中の６月を予定していたが、コロナ感染対策により 11 月に延期となり、中学２年生を中心とする新体制のもと行った。中学生としてのあるべき姿を小学生に示すことができ、小学生にとっては中学生の優しく活気のある様子を見ることができたことで、部活動への不安解消と期待、部活動選択の一助につなげることができた。 体育祭取組み見学は、リーダーとして活躍する中学３年生の姿から小学６年生にとっては、各校の児童会活動や異年齢活動に生かすことができた。 小学５年生の中学校授業見学は、中学校の授業のスピードや授業内容、当てられてもしっかり発言できる様子を見て、自分自身も中学生のようになりたいという思いを持ったり中学校での学習の様子を知る機会となったりした。 ○小中合同アルミ缶回収ボランティアに取り組むことで、子どもたちは網野学園の一員であることを意識することができた。また中学生が小学校に来校し一緒に活動することで、児童会本部役員にとっては、中学生が自信をもって思いを表現して伝える姿に憧れを持ち、目指す姿を学ぶ機会になった。中学生にとっては、小学生が一生懸命に取り組む姿を見て、アルミ缶回収に取り組む意義を考える機会となった。また小学１年生から６年生までが中学生から小学校時代に頑張ってほしいことを聴くことで、中学生をより身近に感じることができた。 ○情報モラルの出前授業を小学４年生と中学生対象に、篠原嘉一氏（ＮＩＴ情報技術推進ネットワーク）を講師に実施できた。ＳＮＳ、ゲーム等の使用における具体的トラブルを知ることができ、今後の使用について見直すきっかけとなった。またＰＴＡを対象とした篠原氏による子育て講演会で子どもたちと保護者が共通の趣旨でＳＮＳ等について学べたことは、家庭での生活習慣の確立を図る上で大変有効であった。

		○今年度不登校等学校不適応の児童生徒が減少している。中でも中学１年生は現在不登校０名である。その要因として考えられるのは、①担任が一つ一つの取組みや学習等について価値付けを行い、居場所がある安心できる学級経営を行っていること②小中連携加配が高学年に入ることで中学校の授業スタイルに繋げられていること③小中学校共に「わかる」授業づくりに意識して取り組んできたこと④小学校時代からペア・グループなど多様な形態で学習することで誰とでも交流できる素地ができていること⑤要配慮児童の情報が丁寧に引き継がれ、スムーズな接続ができていることなどが考えられる。今後も 10 年間を見通して、学校園が家庭との連携を進め、一人一人の幼児児童生徒が、学校園に適応できる力を身に付けていかなければならない。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	ア　目指す子ども像の実現に向けた教職員の協働及び教職員の交流 (ｱ)　教職員の合同研修会・実践交流の実施 (ｲ)　授業研究会を通した研修会 (ｳ)　学年部会を通した研修 (ｴ)　保幼小連携部を通した研修会 イ　落ち着いた学校・授業をつくることを目的とした子どもの交流を図る行事等の計画・実施 (ｱ)　６年生中学校合唱祭参加 (ｲ)　６年生中学校体育祭取組み見学 (ｳ)　合同校外学習及び学びの交流 (ｴ)　小中合同交流事業（友だち交流会等）	○小学６年生の中学校授業体験・体育祭取組み見学、５年生中学校授業見学は、各小学校の児童をグループにして活動させたことで、個々の児童が交流する機会となり、中学校入学後のイメージをより具体的に持つと共に同学年の仲間を知ることができ不安軽減につながった。 ○推進会議が中心となり、学年部会で「単元構想シート」を作成し、それを基に各校で授業改善を進めることができた。11 月には橘小学校で網野学園合同授業研究会を実施し、授業づくりについて各校、各学年の取組みを交流、協議することができた。 ○保幼小連携部では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有しながら、アプローチプログラム・スタートカリキュラムの見直しと検証を行い園所小の協働意識を高めることができた。
家庭、地域社会との連携、情報発信	ア　網野学園学校運営協議会の取組み (ｱ)　網野学園の教育や子育て環境について学校・家庭・地域が一体となり、必要な教育支援を協議し、具体的な取組みを推進して、教育力のある地域社会を目指す。 (ｲ)　網野学園保幼小中一貫教育の推進に向け、学校（ＰＴＡ）、家庭、地域社会が連携して取り組む。 (ｳ)　網野学園の学校運営に関する方針について承認、またその運営状況について評価を行う。	○網野学園学校運営協議会の発足により、学校・家庭・地域が一体となった必要な教育支援について意見交流し、学校づくりへの参画意識の高揚につながった。 ○学期に一度、網野学園合同挨拶運動・交通安全運動を設定して保護者だけでなく関係団体や地域の方と協力しすべての学校であいさつ運動を実施することができた。 ○網野学園家庭教育委員会主催のＳＮＳ講座に篠原嘉一氏（ＮＩＴ情報技術推進ネットワーク）を講師として招聘し、ＳＮＳ・ゲーム等に関わる最新の情報を学ぶことができた。 ○「どの家庭でも、幼児から大切にする『これだけは！』(家庭編)」のリーフレットを保護者に配布し、保護者へ保幼小中一貫教育で大切にしたい視点を知っていただき、協力していただくことができた。 ○保幼小中一貫教育学園コーディネーターが中心となり、学園だより、ホームページ、リーフレット等を通して、学園の教育活動を保護者・地域に積極的に広報することができた。 ○学校支援ボランティア等を活用し、網野町の住民が教育活動に積極的に参加できる取組みを進めることができた。

4　今年度の成果と課題　改善方策

成果と課題	改善方策
○経営会議を定期開催し、学園内の教育課題を共有し、教育目標・目指す子ども像の実現に向けた経営を行うことができた。また本年度より、園所長にも毎回参加してもらい園所経営について共有できたことで、より一層保幼小中一貫教育を進めることができた。 ○学園経営の基本方針に基づいた「重点的な取組み内容」「行動連携」を具現化するために、経営会議が中心となり、各会議・部会等で組織的に進めることができた。	○経営会議は、今後も、学園内の教育課題、各会議・部会等の動きを把握しながら、年間を通して課題を整理したり、新たな取組みを提起したりして、的確な学園経営を行う。また、各会議・部会担当校長・教頭は、経営会議に連絡報告及び決裁を受けながら、実践の方向性・到達点を明らかにし、取組みを進める。 ○教育目標「将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす子どもの育成を図る教育の推進」及び目指す子ども像の実現に向けて、ＰＤＣＡサイクルで、学園経営を行う。

○運営会議、推進会議、領域部会の取組みの進捗状況を把握し、成果・課題を整理し、総合調整や改善に努めた。 ○生徒指導部会、教育相談部会は、年間３～４回部会を実施し、情報機器アンケートの実施・分析、各校の児童・生徒の状況交流等や保幼小、小中引継ぎシートの作成等を行った。また、特別活動部会はアルミ缶回収、給食部は給食参観、道徳部は授業研究会を計画通り実施することができた。	○学園の教育目標、目指す子ども像の実現に向け、中学校卒業までを見通しⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期のゴールにどのような姿を目指すのか具体的な「指標」を作り、その実現に向けた経営を行う。 ○網野学園の最重要課題は学力である。次年度は学力課題に焦点をあて保幼小中一貫教育を進める。これまでの給食部、道徳部の研究については他の関係組織で行うこととし、組織の再編成を行う。 ○今年度は第１回全体研修会が中止となったため、網野学園全教職員で、今年度の重点である授業改善について共通確認することができなかった。捉え方や認識の違いが生じないようにするため、一堂に会して全体研修会や各会議・部会が実施できない場合は、リモート等を活用して実施できるようにする。 ○夏季研修会においては、教育・保育の部分も含めた環境づくりの研修を全教職員で行い、保幼小中一貫教育を更に進める。
○学年部会については、今年度保幼小連携部会を組織に位置付け、園所長、５歳児担任、１年担任が集い交流・協議を行えたことで参画意識をより一層高め、園所小の接続に視点を置いた取組みを進めることができた。 △５、６年学年部会に小中連携加配（数学科）、英語科専科教員が参加したが、同日開催の場合、前半、後半で分担しながら参加することは効果的ではない。小中のつながりを意識した授業改善や授業実践力をより深めるために、部会への参加については工夫を行う。 ○網野学園共同学校事務室が月２回の定例会議を持ち、実務に関する共同の学校事務処理等の研究を進め、機能的・効率的な共同学校事務室経営を行うことができ、各校の課題解決に大きく寄与した。 ○事務局は、事務局会議等で調整や事務作業を行い、経営会議の円滑な進行管理に努めた。また、今年度は新型コロナウイルス感染予防対策のため、年度当初の第１回全体研修会が一堂に会して実施できなかったが、学園として今年度１年間の計画を紙面交流し年間の活動が円滑に進められるよう調整することができた。 ○保幼小中一貫教育学園コーディネーターが、各会議、各部会等に参加し経営会議での方向性等について把握し、整理したり調整したりしながら、目的に沿った連携や取組みを進めることができた。各園所・小学校を訪問し、各校の授業の様子や取組み、便り等を使い発信し、園所間、小小間、小中間をつなぐことができた。 ○保幼小中一貫教育学園コーディネーターが今年度発足した網野学園運営協議会の事務局を務め、地域学校協働本部地域コーディネーターと共に、丁寧な連携を進める中で保護者・地域の方々の学園運営への参画意識の高揚につながった。	○第１回及び第４回５、６年部会については、中学校数学科担当教員・英語科担当教員が参加し、小中のつながりを意識した授業改善や授業実践力をより深められるようにする。なお、第２回及び第３回５、６年部会については必要に応じて参加する。
△重点的な取組み内容として、平成28度より、「規範意識の醸成」「確かな学力の育成」「豊かな人間性」に取り組んできた。行動連携「これだけは」については基礎的なことでもあり、網野学園がスタートしてから継続して取り組む中で積み上がりつつあり、学園の特色ある取組みのひとつでもあることから、今後も継続して取り組む。「規範意識の醸成」については、児童生徒及び教職員アンケート結果や児童生徒の状況から年々向上していることが窺える。更に定着させ学校以外の場でも規範意識を持った行動ができるよう継続して取り組む。「確かな学力の育成」については、Ⅱ期の授業づくりを中心に研究を進める。「豊かな人間性の育成」については、アンケート結果から学年が上がるにつれ、自己肯定感や自尊感情に関わる項目が低くなっている。そのため、学習や活動、日常生活の中で自己肯定感や自尊感情を高めるための手立てを考え、将来への夢や目標をもちその実現に向け自ら主体的に行動できる力を育成する。	○「これだけは！」「これだけは」（授業編）の見直しと改訂を行い、各校で継続して取り組み、落ち着いた環境づくりを進める。 ○網野学園「これだけは（授業編）」から更に進んで、授業づくりの視点や留意点に重点をおいた授業改善を進め、確かな学力の育成を目指す。更には、非認知能力を伸ばすことが認知能力を伸ばすことにつながることから「学びに向かう力、人間性の涵養」の観点から、「主体的に学ぶ力」の育成、「コミュニケーション能力」の育成に視点をおいた授業実践を行う。 ○多様で複雑な不登校の要因や背景をできる限り的確に把握し、切れ目のない組織的な支援をしていかなければならない。重点的な取組み内容の中の「豊かな人間性の育成」に位置付け、「自立的に生きる基礎の確立」に向けて、家庭と連携し系統的に取組みを進める。授業の中で「学びの楽しさ」を感じさせたり、「生徒指導の３機能」を意識した指導をしたりすることは、不登校等学校不適応の減少にもつながることから今後も引き続き推進する。中学校入学前に、４小学校の児童が顔見知りであったり、名前を知っていたり、話したことがあったりすることは、中学校入学後の人間関係づくりの上で大切である。それ

	ぞれの学校規模等状況に応じて、総合的な学習の時間や社会科見学等を活用し、全学年において、必要に応じて小小連携を進めていく。また、学園の連携事業の際には、学校別でなくグループ編成を行った上で、交流するという視点も大切にしながら取組みを進める。
○園所で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を見通した実践研究が意欲的に進められている。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を、子ども達の成長を連続的なものとして捉える際に役立てながら、園所と小学校との連携を一層進める。また、網野学園全教職員による園所参観及び全体研修会での園所の実践報告を通して園所の教育・保育の理解を更に進め、就学前から中学校卒業までの目指す姿の共有と系統的な教育、一貫した指導を行う。	○「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」及び「保育所保育指針」、「小学校学習指導要領」がすでに園所、小学校で全面実施となり、令和３年度には中学校でも全面実施となる。児童・生徒が見方・考え方を働かせて何をどのように学ぶか、学びの質を高めていく必要がある。そのため「確かな学力の育成」に向けた大きな柱として、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、Ⅱ期の授業づくりを中心に研究を深め、実践を積み上げる。 ○網野学園の授業研究のテーマを基盤にして各校の授業改善の充実を図る。なお、授業研究の教科等については、それぞれで決定し研究を深める。 ○主体的、対話的で深い学びの実現に向けた授業デザイン、ゴールの姿をイメージした単元全体を通した授業づくり（単元構想シートの作成・活用）について、研究、実践を推進会議が中心となり進める。なお、学力向上に関する内容について協議する際は小中連携加配も参加する。 ○GIGA スクール構想による一人１台のタブレット導入に見合った授業改善を進めるため、教員が授業のゴールの姿を明確にした授業を構想し、授業スピードをあげ、子どもの活動時間の確保、適応題・活用題を解く時間を確保し、学力の向上を目指す。また、授業における合同の取組みや共同学習などの取組みに活かす。 ○確かな学力を身に付けさせるため、推進会議が中心となり、各校の実態や状況を交流し授業改善に活かす。また、各種テストの分析を丁寧に行い、学園として共通した課題に対して統一した手立てを講じる。その機会として学力充実月間（年３回）を捉え、学園として家庭学習・基礎学力の定着等に取り組む。特に家庭学習については、保護者とも連携し、家庭学習習慣の定着・内容の充実（自主的な学習）を目指した取組みを更に進めていく。 小学６年生においては、思考力・判断力・表現力を付けるために、単元終了時に学習内容の理解度・定着度の検証や把握をするため、単元総括テストを作成し、実施する。小学４年生においては、Ⅰ期の最終学年であり、基礎基本の定着に向けて小４ふりかえり学習を実施する。
△網野学園の課題の一つとして、家庭学習が十分定着できていないことがあげられる。低学年、中学年、高学年、中学校とあがるにつれ、目標とする家庭学習の時間は増えていく。今年度のアンケート結果を見ると、低学年から中学年へはスムーズに移行しているが、中学年から高学年、高学年から中学校に向けての移行で躓いている実態が見られる。	○家庭学習を充実させるため、学園としてⅠ期からⅢ期までの指導指標を示し、家庭学習における目指す子どもの姿を児童・生徒、教職員、保護者が共有し家庭学習に取り組み、確かな学力を付けていく必要がある。また、家庭学習がんばり週間においては、園所では保護者による読み聞かせを行い、小・中学校では情報端末機器利用についての指導を行い、家庭との連携を図りながらメディアコントロールできる力を育成できるよう進める。
△行動連携『どの家庭でも、幼児から大切にする「これだけは！！」（家庭編）』の中の、規範意識の基礎の確立の中で、「テレビ・ゲーム・インターネット・ＳＮＳなどのルールを決める」を挙げている。しかし網野学園生徒指導部会のアンケート結果からも、大きな課題となっているため、生徒指導部、養護部が連携し課題克服に向け取組みを進める。	○情報モラルについての出前授業（学習会）を、小学４年生、中学生、網野学園保護者を対象に、網野中学校を会場として実施し、経営会議、運営会議が主体となって運営する。保護者の部（子育て講演会）については網野学園と保幼小中一貫校ＰＴＡの共催として行う。 ○社会的にもゲームやインターネットの使用による健康被害（ゲーム依存症）が問題になっていることからも、自己コントロールできる力を身に付けるために、生徒指導部と養護部が連携しながら、系統的な指導を進める。
△学園評価アンケートから、「自己肯定感」や「将来の夢や目標」を持つ児童生徒の割合が学年が上がるにつれ、減少する傾向にある。自己肯定感を持ち将来を展望できる力を育むことができるよう、より一層豊かな人間性を育む学習や活動を取り組んでいく必要がある。	○学園評価アンケートについては、指導と評価の一体化の視点から、年度当初に評価内容等の見直しとその周知を行い、目標達成を意識した実践ができるようにするための改善を図る。

（別紙様式２）

令和２年度　丹後学園保幼小中一貫教育報告書

１　「目指す子ども像」、教育目標

①ことばで伝え合い、主体的に学ぶ子　【知】
②自分を大切にし、人を思いやれる子　【徳】
③ねばり強く身体をきたえる子　【体】
教育目標「夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成」

２　保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組みの柱とする内容

①研究主題を『子どものコミュニケーション能力を育成する。』～生徒指導の三機能（自己決定・自己存在感・共感的な人間関係～として、コミュニケーション活動を重視する中で、「主体的・対話的で、深い学び」となる授業改善、確かな学力の育成につなげる。
②保育所・こども園・学校間が連携して、就学前から中学校卒業までを通して適時性、一貫性・連続性のある教育課程を編成し、小中合同事業・保園小接続に係わる事業・小小連携合同事業と３つの事業の充実を目指す。特に、今年度は、保園小に関わる事業を重点に研究を進める。
③丹後学園の取組みや事業等を積極的に発信することで保護者や地域の方の理解を一層深める。

３　保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 （実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等）
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	①子どもの交流を図る行事等の実施を通して、「集団生活の中で人と関わる力」や「コミュニケーション能力」を高める。 ②重点教科を「算数・数学」とし、他教科の指導についても同様に主体的な学びに向けた実践を積む。 ③全体研修会、授業を通した研修会（３回）、学年部会を通した研修を計画的に実施し、目指す子ども像の実現、目指す教師像の意識化に努める。 ④月１回の計画的な経営会議（校園所長会議）を開催し、正確な実態把握に基づく方針を策定し、全教職員への情報提供を行う。	○新型コロナウィルスの影響で休校や制限が入り、経営方針や計画に従って、学園経営を予定どおり進めることができなかった。しかし、困難な状況の中ではあったが、部活動体験、授業体験等は実施することが出来た。また、本年度は丹後学園学校運営協議会を立ち上げることができたことは、大きな成果と言える。 ○運営会議・教育課程会議と学力充実部会・教育相談部会・生徒指導部会・保園小接続部会の４つの部会の実践について成果・課題を明確にし、今後の方向性を示し取組みを進めることができた。 ○学年部会で取り組む研究課題を引き続き設定したことにより、学年部会が充実し教材研究や指導方法の共通化等に取り組むことができた。さらに、目標と指導と評価の一体化を目指した授業研究をすることにより単元総括テストを作成することができた。 《事務局会議（代表・庶務・学園コーディネーター）》 ○事務局会議を開催し、各部の取組み状況や学園内の教育課題の把握・整理を行い、教育目標を実現するための調整・事務作業を行った。 ○学園経営方針に基づき、運営上の課題の検討や調整を行い、各校での年度初・末全体研修会を実施するための事前準備、事務作業等を進めた。 ○経営会議の内容について即日コーディネーターがまとめ、各校・園・所に発信した。 ○教育目標、目指す子ども像を学園単位で設定し、そ

		の実現に向けて一貫性のある教育活動を進め、実践を積み上げることができた。 ○各学校等で課題に応じた教育実践を行い、校種を超えて連携を図り、全ての学校等が中学校を卒業する姿を想定し、目指す子ども像を共有していく意識が高まった。 ●次年度さらに保幼小中一貫教育を推進していくため、子どもの成長につながった具体的な指導方法の資料化や子ども像への到達についての検証が必要である。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	①就学前から中学校までの一貫した生徒指導、自己有用感を高める生徒指導を進　め、コミュニケーション能力の育成に努める。 ②指導方法の系統性や一貫性を重視するために、「目標と指導と評価の一体化」の観点から算数・数学を研究し、指導の方向を２小学校でそろえる。 ③総合的な学習の時間を活用した「丹後学」を教育課程に位置づけ、実践研究を進める。 ④学習指導・生徒指導を大きな柱として、10年間を見通した取組みを展開する。 ⑤小１プロブレムを解消するための、保育所やこども園と小学校との連携を進める。 ⑥中１ギャップ解消のため小学６年生と中学生との交流事業や体験学習等を推進する。	○丹後こども園長、宇川保育所長を含め経営会議を実施し、連携を図ることで一貫した指導について取組みを進めることができた。保幼小の取組みでは、子どもたちの交流により小１プロブレムの解消につながったことや、接続プログラム・スタートカリキュラムを見直し改善を図り、実践したことにより円滑な接続となった。 ○「中学校授業体験、部活動体験」「小学校合同校外学習」「今年度は丹後・宇川合同での１年生と５歳児のなかよし交流」等、内容の充実を図りながら計画的に進めることができた。 ○「丹後学園生活のきまり」「にこちゃんはっぴいーでー（交通安全・挨拶）」の取組みだけでなく、各校で積極的な生徒指導の取組みを行う中で、コミュニケーション能力を高める機会につながった。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	①２小学校が集合して実施する事業と各校で共通して実施する事業を行う。【２小学校合同事業】 ②教職員全体研修会・授業研究会を年間３回実施するとともに、保園小接続部会や期別部会・学年部会を開催して、それぞれの課題の改善や解決に向けた取組みを実践する。 ③中学校１年生入学後１カ月ごろの状況及び出口となる中学３年生の授業公開を行い、多様な視点で課題共有すると同時に指導について研究協議を行う。（第Ⅱ期及び中３の公開授業）【小中合同事業】 ④教職員間…学年部会での授業研究会・統括テストの作成 保園小接続部会でのスタート研修会【保園小接続に係わる事業】 ⑤保園小の子ども…５歳児と小１年生との交流会（２回）	○自己有用感を高め、言語活動をとおして主体的な授業を推進するために小・中学校で「丹後学園学びの指導（指導の視点、学びの力）」をもとに、各校で授業研究を行うことができた。 ○部活動体験・ふれあい交流会等、児童生徒は交流を通して中学校生活への不安を解消する機会になった。 ○合同修学旅行、校外学習、小小の交流が深まり、コミュニケーション能力を高めたり、豊かな学習を創り上げたりすることができた。 ●行事の精選、研修設定を工夫し、適切な時期に実践できるようにしていくことが必要である。

	保園小の教職員…５歳児と小１担任の夏季研修会、テーマは「話す・聞く」	
家庭、地域社会との連携、情報発信	①「丹後学園教育応援会」の機能化と充実を図る。（年間２回） ②「丹後学園だより等」を発行し、保護者や地域に配付することで、理解を得られるようにする。また、各校のホームページにて、取組みの状況を発信するように計画する。 ③学校支援ボランティアの方々による支援をいただき、教育活動の内容充実に努める。	○学園だより・ホームページ・リーフレット等により、情報発信を行い広く学園の教育活動を保護者・地域に積極的に広報することができた。 ○丹後学園教育目標をふまえ、丹後保幼小中一貫校ＰＴＡとして共通の目標と活動方針を設定し、連携・協同した取組みを行うことができた。（6 月、11 月の 15 日を一斉挨拶運動） ○学校と家庭、地域社会の横の連携を深めるために丹後学園学校運営協議会の会議を立ち上げ開催することでき、保幼小中一貫教育の支援、協力、理解を得ることができた。 ○学園評価計画に基づいて、アンケート等をとり、改善に生かすことができている。 ●保幼小中一貫教育の成果をさらに広く発信し、地域住民へ学園の重点が浸透するように本年度の取組みを継続していくことである。

4　今年度の成果と課題　改善方策

成果と課題	改善方策
【今年度の成果】 ①導入準備期間を含め６年間行ってきた実践を活かして、本実施５年目の丹後学園の経営を行った。組織や会議について当初計画したことが、コロナ禍で、変更を余儀なくされたが、安全を優先し、可能な範囲で実施できた。 ②丹後学園運営協議会（名称：丹後学園教育応援会）を立ち上げ、地域への啓発に心がけ、活動が前へ進んだ。 ③小・中学校だけでなく、こども園・保育所も含めた取組みの実践を進め、『子どものコミュニケーション能力を育成する。』を研究主題に掲げ、各保園小中のそれぞれの実態に合った研究が進んだ。保育所やこども園の園児の状況を学園として情報共有を行うことができ、保園小の接続に関する学園としての研修が進んだ。 ④小１プロブレムを解消するための、保育所やこども園の園児の状況を学園としての情報共有と交流を丁寧に行い、令和元年度の「教育フォーラム」で発信した「丹後学園」の研究をさらに深めてきた研究の推進を行った。 ⑤小学校間（校区２小学校）の学年ごとの合同学習、修学旅行等を行い、児童の交流が深まると同時に教員の指導方法等の交流も深めることができた。 ⑥２学期末に６年生の授業参観と懇談をもつことによって、小中の連携の円滑な接続が組織として積極的にできた。小学校においては、３学期にどのような力をつけて中学校に送り出せばよいのか見通し	○経営会議は、次年度も、学園内の教育課題、各会議や部会等の活動状況を把握しながら、恒常的に課題を整理や新たな取組みを提起し、学園経営を行う。 ○各会議・部会担当校園所長は、経営会議に事前連絡、事後報告及び決裁を受けながら、実践の方向性・到達点を明らかにし、取組みを進めていく。 ○部会は、学力充実部、教育相談部、生徒指導部・保幼小接続部の４部会とする。 ○教育課程会議兼学力充実部会については、教務主任が担当し、学力の調査・分析や学力・授業力向上を図る計画・実践に関わる進行管理、検証等を行う。 ○令和３年度京都府給食研究会に向けて、学園の中に対応する特設組織をつくる。 ○令和２年度と同様に、重点的な取組み内容として「確かな学力の育成」「コミュニケーション能力」「評価を通した取組みの充実」を設定していく。 ○保幼小接続部として、保育所・こども園の保護者に対して、小学校で必要な力や社会性など一緒に学べる機会を設定していく。 ○授業研究については、「主体的・対話的で、深い学びの授業づくり～生徒指導の３機能を生かして～」を研究主題として学園で研究を行う。全体の授業研究会では、児童生徒の実態や課題から、教科を国語に決め研究を深める。また、算数科も軽視できない状況であり、学年部会では、算数科の授業づくりを互いに検討・交流し充実させる。 ○小学校で気になる児童が、中学校で適応しにくくなることもあるので、児童の見立てや支援、家庭との連携を大切にして教育相談活動を行い、小学校での様子（本人・

をもつことができ、中学校においては、余裕をもって各学校の集団の雰囲気や児童の実態や課題などの把握ができ、入学後の見通しがもてた。 ⑦小学校在籍中１５日以上欠席のある児童の個別記録「丹後学園教育相談ファイル」を作成し、実態や指導・支援のあり方等を円滑に中学校に接続する予定である。 ⑧限られた中であってもリモート研修などの工夫を行い、小学校と中学校との教職員の意見交流及び合同研修を通して、相互理解を深めることができた。また、実態に応じた指導方法の工夫・改善について、各校ごとの授業研究会を通して研究協議を行い、前進させることができた。また、ゴールとなるめざす中学３年生の姿を共有することができた。 ⑨昨年に引き続き、算数・数学の指導を中心に研究を行うことで、目標と指導と評価の一体化を目指す授業づくりの研究の充実を図ることができた。 【今年度の課題】 ①今年度の研究テーマを継承しながらも、児童生徒の実態から、次年度は国語の教科研究を深めていく。 ②学力向上に資するための「モデルカリキュラム」の活用をさらに進める。 ③総合的な学習の時間の学習内容に重複があるので、丹後学園としての総合的な学習の時間の系統立てた内容づくりが課題としてある。	家族・医療との連携等）を丁寧に記録に残し、中学校につないでいく。 ○学園ＰＴＡと連携し、「家庭学習の手引き」を活用しながら、家庭学習習慣の確立を目指した取組みを更に進めていく。 ○ケース会議等を通じて、本人を取り巻く生活環境や保護者の生育歴等の実情を踏まえるとともに、子の将来を見据えた指導の支援策を関係機関と連携を図り、対応していく。 ○「コミュニケーション能力の育成」に関しては、生徒指導の三機能（自己決定・自己存在感・共感的な人間関係）を生かした取組みを充実させていく。特に、授業の中にも生徒指導の３機能を生かした実践を積み上げていく、積極的な生徒指導を行う。また、学校や地域社会の一員として集団の中で人とかかわる機会を生かし、コミュニケーション能力を身につける。 ○学園評価について、令和３年度についても、目標を立て、指導し、評価をしていき学園経営を実践していく。また、教育目標の達成に向けた取組みの成果と課題をより明確にさせ、具体性のある改善策を検討していく。

（別紙様式２）

令和２年度　弥栄学園保幼小中一貫教育報告書

１　「目指す子ども像」、教育目標

【ふるさとを愛し、主体的に学び、心豊かで、たくましく生き抜く子どもの育成】

２　保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組みの柱とする内容

１「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業づくりの推進
・授業実践力等の向上（他校種研修、授業研究会、全体研修会等を通じて）
２　自尊感情の醸成を目指し、生徒指導の３機能を生かした実践の推進
・異年齢の交流活動、自尊感情、自己有用感、上級生への憧憬
３　教育活動全体を通して「思いやる心」の育成
・教科としての道徳の授業改善
・情報を吟味し精査する力の育成

３　保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 （実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等）
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	１「自立の基盤をつくる」 弥栄学園として保幼小中一貫教育の取組みを計画的に進め、着実な実践と評価をする。 （１）学園内の教育課題、各会議、部会等の活動状況の把握、指導助言 （２）発達課題をふまえた指導の系統性を重視 ２「教職員の連携」 教育目標、目指す子ども像等を共有し、重点課題及び取組みの柱を定め、実践する。 （１）学力の定着、コミュケーション力、規範意識向上、教職員の資質向上 ３「信頼される学園」 学校・園・家庭・地域社会が連携した「横の連携」を深め、教育目標の具現化を目指す。 （１）弥栄学園運営協議会との連携、教育環境づくり	○経営会議が運営会議、教育課程会議、学力充実部会、その他学年会を含めた各部会の取組みの進行管理と評価をその都度行うことで、弥栄学園として保幼小中一貫教育の取組みが計画的に進められるようにした。 ○重点課題『主体的・対話的で深い学びの実現を目指す授業づくり』『自尊感情の醸成を目指し、生徒指導の３機能を生かした実践』『思いやる心の育成』について、学園での授業研究会や交流行事、各校での授業づくりの取組みや行事等、様々な教育活動を通して取り組むことができた。 ○弥栄学園運営協議会が新しいメンバーでスタートした。今年度はコロナ禍のため、学園の取組みを見ていただく機会がなかったが、学校関係以外の方が多く含まれているので、来年度以降様々な視点から多様な意見を頂き、学園の教育活動にいかしていきたい。 ○地域のボランティアの方々にお世話になり、それぞれの園、学校の教育活動や弥栄学園の交流行事を支援していただいた。子どもたちと地域の方々との交流が深まるとともに、学園の取組みに対しての地域の方々の理解が進み、学園・園・家庭・地域社会が連携した「横の連携」を深めることができた。 ●コロナ禍のため、全体研修会が年間を通じて中止となり、学園の教育目標、目指す子ども像、重点課題及び取組みの柱について、学校、園ごとの確認となり、学園全体としての研究を深めることが難しかった。

就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	1　学力向上、授業づくり （1）園小中の接続を意識 ア こども園参観、実態報告後研修 （2）授業研究等 ア 公開授業後の研究協議（日々の授業に生かすポイント、課題の整理等） 2　教育活動全体を通した「思いやる心」の育成 （1）子どもの実態を把握し、適切な指導について研究協議を行う。 ア 合同研究会 イ 公開授業 ウ 況交流 （2）交流活動の活性化を図る。 ア 幼児、児童、生徒の交流活動（幼小連携、小中連携） （3）生徒の３機能を生かした実践を推進する。 ア 自尊感情の醸成 3　いじめ、不登校等に関する情報の共有化 （1）配慮を要する児童・生徒の実態交流をもとに学園としての指導・支援の在り方につい研究する。 ア 引継ぎシートの活用 イ 指導、支援方法の在り方の研究	○「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業づくりを、「他者の意見をふまえ、自分の意見をもち、発信する力をつける」の研究主題に授業改善に取り組んだ。今年度学園全体の授業研究会は、一度しか開催できなかったが、それぞれの学校で実施した公開授業に他の学校にも参加を呼び掛ける等して、学園として授業づくりに取り組んだ。 ○学園の授業研究会では、参観の視点が明確で、教育課程会議から学園としての主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくりについての説明があり、小中の校種の違いや教科に偏ることなく協議を深めることができた。今後の授業づくりについて『単元の学習計画を児童生徒と共有する』、『やってみたい、考えてみたい学習課題やねらいの設定』等、学園全体で意識することが確認できた。 ○「円滑な接続ができるよう０～Ⅰ期、Ⅲ期を充実させる」ことを学園の取組みの柱とし、学園全教職員による０期やⅢ期の授業参観等を予定していたが実施できなかった。しかし、授業研究会や園小接続部会等では、それぞれの発達特性に即してⅠ期からⅢ期にふさわしい効果的な指導方法等を確認・共有することができた。 ○経営会議で、こども園、小学校、中学校の園児、児童、生徒の状況（生徒指導の状況、不登校等）を交流した。家庭環境や地域の情報を共有することにより、各校、園での指導にいかすことができた。 ○教育相談部会において、引継ぎシート等をもとにした子供の交流や分析は、組織的・計画的に支援を行うための資料として役に立った。 ○教育相談部会にスクールカウンセラーが参加し、不登校等に対して専門的な助言をいただいたり、校内研修の講師、ストレスマネジメントの授業をしていただいたりすることで、新たな指導の視点を学んだり、児童生徒・保護者に対する適切な対応や、不登校の未然防止につなげることができた。 ●今年度、学園の全体研修会で、京都教育大学の植山教授をお招きし学園の重点である「主体的・対話的で深い学びを支えることばの力の育成」について講演していただく予定であったがコロナ禍により中止となった。授業づくりや評価などについての講演、研修の場を毎年企画し、指導力向上につなげていく必要がある。 ●よりよい人間関係の構築、自尊感情の醸成を目指して、生徒指導の３機能を視点として、「思いやる心」の育成のため、教科としての道徳の授業改善に継続して取り組む。

幼児児童生徒、教職員の交流と協働	1　子どもの活動 （1）幼小・小小・小中の交流活動 　ア 体験授業、合同授業、部活体験等 2　教職員 （1）全体研修会 （2）保幼小中合同授業研 （3）出前授業（中から小へ）	○小学５・６年生を対象に部活動体験を行った。多くの児童が、中学入学後の部活動に期待を寄せており、部活動が経験できたこと、中学生と交流できたことを喜んでいた。児童の中学校入学に対する不安を軽減するとともに、中学生にとっても自尊感情、自己有用感を感じられる生徒指導の３機能を生かした取組みになった。 ○中学校への入学説明会が中止となり、体験授業を各小学校に出前の形で行った。児童は、中学校の授業の雰囲気に触れ、中学校入学が楽しみであると期待を高めた。 ○小学１年生と年長児との合同交流を行い、一緒に楽しく交流できた。園小の接続に、大きな効果が見られるので、今後も継続して取り組んでいく。 ●コロナ禍により、保幼小中の交流行事の中には内容を変更したものや、中止となるものもあった。これまで、交流行事が小学校入学や中学校入学の際の子どもたちの不安を軽減することに大きな役割を果たしていただけに入学後の子どもたちの様子をこれまで以上に丁寧に対応する必要がある。 ●小中の交流行事の運営や学校間の調整について特活部会と運営会議の関わりについて検討の必要性が感じられた。来年度の学園組織の見直し（特活部会を廃止し、運営会議がその役割を担う）を行う。 ●園小の交流行事について、こども園と小学校がそれぞれの交流行事に対するねらいをもとに、学園の重点課題や研究主題を考慮し、系統的な視点をもった交流になるように打ち合わせ・計画する。
家庭、地域社会との連携、情報発信	1　連携を図る （1）PTA、地域ボランティアの協力 　ア 登校時のあいさつ、交通安全指導 　イ マラソン大会時の交通安全 　ウ 学校行事参観 （2）情報発信 　ア　リーフレット作成 　イ　たより、HP による行事等紹介	○こども園、小学校、中学校がそれぞれに、たよりやホームページで各校の取組みを発信するとともに、学園ニュース（教職員向け）、保幼小中一貫教育だより（保護者、地域向け）や学園ホームページでタイムリーに情報を発信し、学園の動きを広報した。 ○学園のリーフレットを作成し、保護者や弥栄学園運営協議会その他地域の方々に配布したり、弥栄町区長会や弥栄学園運営協議会で学園の活動を紹介したりして、弥栄学園の活動についての啓発を行った。 ●学園の活動や教育目標に対してさらなる理解や協力を得るために、啓発活動と同時に弥栄学園 PTA と連携した活動にも取り組んでいきたい。

4　今年度の成果と課題　改善方策

成果と課題	改善方策
1　経営会議 （1）年間を通して、各会議・部会の取組みの成果や課題を明確にし、教育実践の方向性や到達点を明らかにした。 （2）月１回のペースで定期的に会議を設定し計画の進捗状況や園・各校の状況も交流しながら計画を進めることができた。 2　肯定的評価、課題（アンケートから） （1）話し合い活動を重視した指導を継続し、その成果として話し合い学習が児童生徒にも意識化されている。また、人前で話すこと、友達の意見を聞くことの意識を高めている児童生徒が増えている。 （2）「弥栄町のことが好きだ」と肯定的に回答した児童生徒の割合が 93%にのぼり、弥栄学園が大切にしている「ふるさと愛する」気持ちが育っていることが分かる。 （3）コロナ禍ではあるが、家庭学習の継続した取組みにより、自分から進んで学習する児童生徒が昨年より増加した。 （4）「自己肯定感」が小中学校ともに全国平均より低く、「将来に夢や目標がある」については、ほぼ平均的である。 （5）多くの保護者から保幼小中一貫教育について理解が得られているが、「分からない」と回答していることも園の保護者の割合が 20%と高い。 （6）合同研修会の効果を肯定的に評価する教員の割合が 92%に達しており、研修の意義が実感できるものとなっている。 （7）「配慮を要する児童生徒の指導等により不登校の減少や未然防止につながっている」と考える教員が昨年よりも増え、学校間の児童生徒の情報交換が組織的に行えている。	1　次年度の京丹後市保幼小中一貫教育授業研をとおして、小・中学校での授業づくりに力点を置き、各指導区分の充実をめざした研究を深める。 （1）保幼小中学校１０年間を見通した指導展開をしていく。(園から小、小から中への発達過程を踏まえて、系統的な計画を意識して進める。) （2）他者の意見を尊重し、自分の意見をもち、発信する力をつける。 （3）外部から講師を招き研修の機会を設ける等指導力の向上につなげる。 （4）ＩＣＴを積極的に活用し、授業づくりや交流行事にいかす。 2　よりよい人間関係の構築、自尊感情の醸成を目指して、生徒指導の３機能を視点として、「思いやる心」の育成のため、教科としての道徳の授業改善に継続して取り組む。 3　交流・連携活動により体験活動を活性化する。 （1）園と小、小と小、小と中との活動により、自信と責任、自己有用感を身に付け、上級生への憧憬の念を高める機会とする。 4　学園の教育目標の具現化を図るために、機能的な動きに加え、効率よく取組みの運営ができるように組織を整理する。 （1）教育課程会議の中に学力充実部を統合する。 （2）特別活動部会を廃止し、小中の交流活動の企画立案や連絡調整は運営会議が行う。 （3）学年会を協議の内容によって、学年ごとの開催や低学年部、中学年部、高学年部の開催とする。 （4）特別支援学級担任会を学年会の一つとして位置付けるとともに、教育支援部を廃止する。 （5）京丹後市授業研究会に向け、教育課程会議に校長１名、教頭１名が入る。 5　その他 （1）積極的な公開や情報発信 （2）関係機関、地域との連携（運営協議会との連携）

（別紙様式２）

令和２年度　久美浜学園保幼小中一貫教育報告書

１　「目指す子ども像」、教育目標

［教育目標］
「ふるさとを愛し、意欲的に学び、やさしい心をもち、根気強く努力する子どもの育成」
［目指す子ども像］
（知）意欲的に質の高い学力を身につけようとする子ども
（徳）自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子ども
（体）心身を鍛え、粘り強く最後まで、協力して取り組む子ども

２　保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組みの柱とする内容

（１）中期的な展望（取組みの見通し）

年度	教職員の意識	学力	ギャップ（不登校）
２８（1年次）	各校の取組みの共通点をベースに取り組む	共通項をもとにした取組み	保幼小の接続・各校の取組み交流
２９（2年次）	学園中心の事業の展開・10年間のカリキュラム（必要な教科）検討	授業についての論議・これだけはの推進	児童生徒の情報共有・指導の継続性
３０（3年次）	中3卒業までに付けたい力と指導についての教職員による論議	接続を意識した授業スタイルやスキルの追求	情報共有・指導の在り方確認
１（4年次）	指導の充実期・新学習指導要領と新教科書への対応（小）	接続を意識した授業スタイルやスキルの追求	情報共有・指導の系統性確認
２（5年次）	久美浜学園保幼小中一貫教育の継続した取組みの整理とまとめ・新学習指導要領と新教科書への対応（中）	授業スタイルの充実	情報共有・学園としての指導の継続

（２）重点目標

「意欲的に生活・学習に取り組む子どもの育成」～子どもの実態や系統性を踏まえた指導～

（３）指導の重点

『学力向上』①基礎・基本の徹底　②主体的に学ぶ力の伸長（授業づくり）　③家庭学習時間の確保

（４）取組みの柱

ア　10年間（就学前から中学校卒業まで）の幼児児童生徒の成長発達に全教職員で責任をもつという意識の向上
　(ｱ)久美浜学園全教職員がチームとして、みんなでやるという協働意識を醸成する。（対話と理解）
　(ｲ)目指す授業として、学習指導要領に示された「主体的・対話的で深い学び」の実現を意識する。その上で、学園テーマとして、「主体的に学ぶ力の伸長」を設定し、すべての教職員で幼児児童生徒が自らの主体的に学ぶ力を伸ばすための教育活動を進める。
イ　各校園所における規範意識の醸成を基盤とした落ち着いた学校（園）づくり、授業づくり
　(ｱ)生徒指導の三機能（自己決定・自己存在感・共感的人間関係）を生かした「わかる授業」により規範意識を醸成し、学ぶ意欲を育てる。
　(ｲ)基礎・基本を徹底し、基盤となる力を十分付けきる。
　(ｳ)系統的な「言語能力」の指導とスキルの向上を目指した取組みを進める。
ウ　子どもの交流行事並びに教科指導交流の推進による行動連携強化
　(ｱ)共に学ぶ意識を育て、子ども同士を結び付ける保幼小、小小、小中における交流行事
　(ｲ)豊かな教科指導を目指す指導交流（保幼小連携、小小連携、小中連携）
エ　保護者、地域とともに「久美浜を支える人づくり」の視点に立った取組みを進める。
　(ｱ)ＰＴＡ、学校運営協議会、地域学校協働本部事業との連携
　(ｲ)家庭学習時間の確保に向けた連携

３　保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 （実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等）
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の	(1) 経営会議を中心に組織的且つ丁寧に、実態や課題、目標、方針等の共通認識を図り、久美浜学園としての共通確認・共有を図る。 ア　年度当初の学園全体会での提起と	○久美浜学園７校園が一つの目標に向かって取り組むことができ、保幼小中一貫教育を手段として取り組んだ。今後も「理解と対話」を進め、その上で具体的に取組みを進める。 ○テーマや子ども像を受けた様々な取組みの中で、教

共有方策	全体研修会での全教職員による協議を通して、共有を進める。 イ　年３回の公開授業と交流会で、教職員同士の「理解と対話」の充実を図る。 (2) 保幼・小・中で共通指導内容を確認し、ＰＤＣＡで改善を図りながら共通理解を深める。	職員が交流する機会が少なく、例年に比べて相互理解という点では弱かった。今後も丁寧に進めつつ、学園全体で取り組んでいる意識を高める。 ○共通指導事項を確認し、指導を継続していく。今後も、常に目標やめあてを振り返りながら進めていく。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	(1) 子どもの育ちと指導の一貫性を目指した教育課程編成 ア　考えを深め、コミュニケーション能力を高める学習の推進 イ　郷土への愛着と誇りをもち、人とつながる力を育てる学習の推進 ウ　保幼小の接続を中心とした教育課程編成 (2) 重点指導 ア　学力向上 (ｱ) 授業規律の確立 (ｲ) 基礎学力の定着と活用力を育てる授業づくり イ　不登校の解消 (ｱ) 規範意識の醸成と基本的生活習慣の確立 (ｲ) 学級活動の充実と児童会・生徒会活動等自主活動の活性化 (ｳ) 自尊感情の高揚 (ｴ) 保幼・小・中の連携強化 ウ　今日的課題（情報機器の安全な取り扱い） (ｱ) 「法やルールに関する教育」の推進 (ｲ) 人権教育の推進	○学園テーマ「主体的に学ぶ力の伸長」を各校で追求し、ICTを活用した授業づくりを進めて研究の成果を市教育フォーラムで発信できた。 ○学園独自で作成したアプローチプログラム、小１スタートカリキュラムの実施状況を検証し、よりよいプログラム等になるように改善した。 ○久美浜学園「身に付けたい言語能力表」や小中共通指導事項を確認・検討して取り組んだ。 ○小学校でつける力を意識でき。6年生の春休みの課題について見直すことができた。 ○ＩＣＴを活用した授業づくりについて、どの場面で、どのように使うのか各校で研究を進めた。今後は授業スタイルの中にＩＣＴを組み入れ、より効果的な活用についての研究を深める。 ○ＰＴＡ・保護者会を巻き込んだ久美浜学園共通の「家庭学習がんばり週間」の取組みを進めることで、学習習慣の定着を進めた。教育課程会議から家庭学習時間の確保、養護部会では保健指導、生徒指導部では情報機器に関するアンケートを行いメディア・コントロールを学園全体で進めた。 ○教育相談部会では、スクールカウンセラーによる個意義を行い「自己肯定感を高めること」について研修し、各校・園所の情報の交流と指導方法の連携を進めた。 ○不登校については、兄弟で同じ状況になっている家庭もあり、小中で指導等について連携し取組みを進めた。 ○学校生活の充実感を味わわせることや基本的生活習慣の確立を各校で図ること、教育相談部における事例研を通して、不登校の未然防止、解消に取り組んだ。 ○情報機器の望ましい活用（情報モラル）のための特別講演会を小4、全中学生対象に実施した。次年度は小３も対象にする。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	(1) 全体会、全体研修会、学校園公開授業と分散会、学力・授業づくり部会、生徒指導・不登校防止部会、学年部会を中心とした教職員の交流と協働 ア　中学校卒業時の生徒の姿を常に意識した協議 イ　児童生徒の実態交流に基づく具体的な取組みの推進	○全体会・公開授業、交流会等の教職員の行動連携につながる取組みは中止となったが、少人数で集まる部会は回数を減らして実施した。実際に子どもの姿を見ることで、保幼小中の指導の連続性をより確かなものとできるので次年度も計画していく。 ○教職員の行動連携においても、交流の継続の大切さと同時に、資料の相互提供など工夫も行う。 ○各校の授業研の案内を出し、相互参観ができた。事

	ウ　「主体的に学ぶ力の伸長」の系統性を意識した指導を目指す授業研究 (2) 学校、校種間をまたがった指導の推進 ア　小小連携、小中連携、専科教育、出前授業等、人的交流をもとにした協働 イ　振り返りスタディ等指導面での協働 (3) 幼児児童生徒の行動連携 ア　保幼の連携 イ　保幼小の連携 ウ　小小連携 エ　小中連携	後研究ができた学年もあった。 ○教育課程会議を中心にICTの活用について各校の取組みを集約し、学園だよりによって情報共有し研究が進んだ。 ○児童生徒の行動連携事業についても、取組みに価値を見出し、そのことを活用して日々の指導に生かす。 ○小小連携事業の内容や時期については再検討を望む意見がある。今後、オンラインを活用した交流も行っていく。 ○ねらいは中学校での出会いのための「仲間を知る」ということにしぼり、負担の無いように進めていく。 ○小中連携は部活動見学交流会だけの実施であったが、不安解消になったと児童アンケートで答えていた。 ○児童会・生徒会の合同会議はオンラインで2回実施できた。
家庭、地域社会との連携、情報発信	(1) 久美浜学園小中一貫教育に係る目標、活動等の広報及び啓発 ア　たよりの発行（学期1～2回程度）、有線放送による取組み紹介 イ　リーフレットの作成（4月保護者参観等で配布、説明） ウ　ホームページによる広報活動（久美浜学園のページ作成） (2) 基本的生活習慣の確立に向けた共通指導の確認と指導の推進 (3) 学校運営協議会の取組みを通した「久美浜を支える人」の協議 (4) 地域学校協働本部事業の積極的な活用等による久美浜町民の学校教育活動への参加と積極的支援 (5)久美浜学園ＰＴＡ・保護者会との連携による家庭教育支援	○小中一貫コーディネーターの活動により、様々な取組みをいろいろな機会を通じて広報できた。保護者アンケートでは、学園の取組みに対する肯定的な意見が増えている。しかし、今年度は事業の中止等があり、分からないという意見が多かった。 ○旧小学校ごとの6つの地区の区長会等に校長、コーディネーターが参加し発信する場を設けた。 ○学校運営協議会は2回実施し、学園の基本方針を説明し、3つの部会ごとに「久美浜を支える人づくり」について各団体との協議し学校から児童生徒の課題について提起した。市の教育フォーラムでは、取組み発表を行った。 ○多くのボランティアの皆さんの協力を得られたが、コロナ禍において活動が制限された。 ○久美浜学園独自のＰＴＡ・保護者会が一緒に取り組むことで、より多くの家庭との連携が進められた。「あいさつ運動」「家庭学習がんばり週間」等10年間を見通した取組みに一歩ずつつながってきている。

4　今年度の成果と課題　改善方策

成果と課題	改善方策
○5年間の活動について整理し、実践を重ねてきたことの価値が再確認できた。今後も積み上げてきた取組みを可能な限り続ける。 ○テーマ「主体的に学ぶ力の伸長」が授業公開と交流会は実施できなかったが、各校でICTを活用した授業づくりの研究を進め、たよりによって各校の実践の情報交流ができた。11月の市教育フォーラムでは、各校授業公開を行い、研究の成果を発信した。 ○経営会議の方針のもと企画運営会議が運営し、教育課程に関しても一致して進めるシステムがさらに機能してきた。	・令和3年度（6年次）からは新たな中期展望を設定し、取組みを進める。これまで積み上げてきた保幼小中教員の「対話と理解」をベースに、次の段階にステップアップしていく。保幼小中一貫教育推進計画の共通理解を図り、更に学校園所公開や交流会を引き続き進める中で指導方法等の継続性について論議していく。 ・学力向上に向けて、具体的な取組みを進める。拡大教育課程会議において、中学校の国語・数学担当から生徒実態や課題の提起を受け、解消のための方策を検討する。 ・今年度の研究をもとに、さらにICTを手段として活用し「主体的に学ぶ力の伸長」を目指す。

○コーディネーターの活躍により、広報・会議のまとめ・幼小中のつなぎが確実に進んだ。 ○４ＰＴＡと３保育所園・こども園の保護者会も一緒に活動でき、学園ＰＴＡ・保護者会の基盤がより確かなものになった。 ○学校運営協議会で「久美浜を支える人」について３つの部会で学校からの課題を提起して話し合った。 △幼児教育・保育における取組みについて学び、幼児から小学校への接続やその意義についての研修機会がとれなかった。 △久美浜学園の児童生徒の課題として、不登校の増加がある。各校で取り組んでいるが、具体的な成果が出ていない。 △連携部会の取組みは回数が限られている中で、ミッションを成果が見えるところまで高めることが難しかった。 △学校授業公開と交流会の成果は非常に大きなものであるが実施できなかった。各校の重点研究をベースに担任会での学び合える機会を設定したが、授業研究までは踏み込めなかった。	・児童生徒の生徒指導上の課題や不登校の課題について、肯定的評価を基盤に学園の教職員の指導観を見つめ共通化していく。教育相談部では、夏に事例研を行い、傾向や未然防止、初期対応について研修を行い、各校に広めていく。 ・校種間での情報連携や家庭支援連携を進め、不登校の未然防止や早期対応に努める。 ・指導方法の具体的な継続性を図るため、保幼小のアプローチ・プログラムやスタート・カリキュラムのほか、小中間の教育課程上の様々なギャップの解消に取り組むため授業スタイルの確立も進める。 ・授業研究に踏み込むため、各学校の重点研究をベースに担任会での学び合いを進めるため、研究授業に参加しやすくするための日程調整を行う。 ・行動連携事業はオンラインを活用した実施方法を検討する。 ・運営面ではこれまで進めてきた部会・会議や事業が実施できなくなった状況で、改めて事業等の意義について確認でき、今後を見直すきっかけになったので内容を精選していく。